

4 近畿地方の小豎穴式石室 —長法寺南原古墳前方部小石室の意義をめぐって—

福 永 伸 哉

(1) はじめに

長岡京市長法寺南原古墳の第6次調査において、前方部頂部から小豎穴式石室が検出されたことは、ある意味でわれわれ調査団を驚かせるものであった。それはこの種の石室が畿内の前期古墳の埋葬施設としてはきわめて稀な存在であり、なおかつ、前方部埋葬とはいえ全長60余mの前方後方墳の主要な埋葬施設として構築されていたからである。

残念なことに、この石室はすでに著しい削平を受けており、得られる情報の量は多くない。しかし、畿内の前期古墳においてこうした埋葬施設が存在すること自体に、実は古墳時代墓制の性格の一端を明らかにする手がかりが示されているともいえるのである。

(2) 研究略史と小稿の目的

豎穴式石室に平面形態や大きさの異なる複数のタイプが存在することは小林行雄によって早くから指摘されていたことである。氏は1941年に公表された「豎穴式石室構造考」の中で、当時明らかになっていた各地の豎穴式石室の規模を比較して「Aは長さ1.5ないし3.5メートル、幅0.5ないし0.9メートル（高さ0.5ないし0.9メートル）のもの、Bは長さ5ないし8メートル、幅1メートル前後（高さ1ないし1.5メートル）のもの、Cは長さ2.7ないし6メートル、幅1.5ないし2.5メートル（高さ1.2ないし2メートル）のもの」という3者の違いを見いだし、B群は割竹形木棺を使用した長大な石室、C群は内部に石棺を持つ石室であるとするすぐれた見解を示した。⁽¹⁾ ただ、小稿のテーマとかかわるA群については、良好な資料の蓄積が十分でなく、また論述の主眼がそこに置かれていたこともあって、A群には木棺を使用したものと使用しないものがあったと推定されること、分布が畿内より西に偏っていることなどを指摘するにとどまっている。

その後の豎穴式石室研究は、小林がB群とした長大な石室にかんするものを中心に行開した。その一方で、北部九州においては箱式石棺と豎穴式石室を折衷したような小規模な埋葬施設の発掘例が1960年代後半以降その数を増し、「石棺系（豎穴式）石室」という名称で呼ばれるようになつた。⁽²⁾ こうした状況を受けて、1974年には上野精志、山中英彦が九州地方に存在する豎穴式石室を構造面に着目して3者に類別した。⁽³⁾ 設定したタイプの評価についてはやや見解の相違がみられるものの分類そのものはほぼ共通しており、山中の記述を借りれば「偏平割石小口積みの畿内型（I類）と畿内型を受容し伝統的墓制を脱した塊石積みの豎穴式石室（II類）と箱

式石棺を母胎に豎穴式石室を導入した石棺系石室（III類）」に分けることができる。そして、基本的にはI類の長大な畿内型石室の要素を在地化した形で受容してII、III類の小豎穴式石室が成立したととらえている。その後、北部九州の小豎穴式石室は小田雅文、木下修、中間研志らによって整理が行われているが、おおむね同様の理解に達しているといえよう。⁽⁴⁾

ところで、ここ20数年の新たな墳墓研究の進展によって、弥生時代終末期（庄内式併行期）～古墳時代初頭の中部瀬戸内地域において小規模な豎穴式石室を有する首長墓の存在が明らかになってきた。これらは割石や塊石あるいは河原石を積み上げて構築する石室であり、箱式石棺の枠組みを基礎に持つ石棺系石室とは異なるものである。名本二六雄はこの種の石室について広島県の事例を整理している。⁽⁵⁾また、都出比呂志は豎穴式石室の型式学的研究を行うなかで、石室を長大型と短小型に分けてとらえ、長大型石室の出現については弥生終末期の短小型石室が飛躍的に規模を拡大したものとする見解を示した。⁽⁶⁾

このように同じ小豎穴式石室という名で呼ばれるものの中には、長大な豎穴式石室の祖形になったような弥生終末期以来の小石室と、古墳時代になって首長墓の豎穴式石室からの影響下に新たに成立した小石室の2者が含まれるのである。小豎穴式石室の分析にあたってはそれぞれの石室の系譜を見極めながら議論を進めて行くことが必要であるが、多くはこれからの課題である。

近畿地方においては、小豎穴式石室の検出例が少ないこともあって、加古千恵子が兵庫県山東町柿坪中山古墳群の小石室について若干の検討を行った以外には、これまであまり分析が加えられることはなかった。したがって、まずその実態を把握することから出発する必要がある。小稿では、これまでの研究史をふまえて古墳時代前期を中心に近畿地方の小豎穴式石室の様相を明らかにすることを第1の目的とし、さらに畿内では稀なこの種の埋葬施設が南原古墳に存在する意義についても考えてみたい。

（3）近畿地方の小豎穴式石室とその分類

小豎穴式石室を集成して検討を行う場合、本来ならまずその定義が必要であろう。ただ、筆者自身近畿地方の豎穴式石室のすべてを比較する作業を行っていないので、ここではかりに内法全長が3m未満、壁体のすべてまたは一部が2段以上の積み石で構成されているものを小豎穴式石室（小石室と略称することもある）として扱うことにする。現在の発掘状況からみて長さ3～4mあたりに度数分布の谷間が存在すると推定されることも、消極的ではあるがとりあえずここに線引きをする理由である。⁽⁸⁾対象とする資料の時期は古墳時代前期を中心とし、一部中期前半と考えられるものもこれに加える。

文末の表3にはこれまでに知り得た近畿地方の小豎穴式石室をあげた。18の遺跡から類例が確認されているが、これらは壁体構造からみていくつかのタイプに分けることができる。

石積み小竪穴式石室 石室の四壁を下段から上段まで積み石によって築くものである。壁体を構成する石の大きさは下段から上段までほぼ同じであるが、兵庫県佐用町吉福遺跡のように円礫（河原石）を用いる例と大阪府柏原市松岳山古墳⁽⁹⁾のように割石を積み上げるものがある。

石棺系小竪穴式石室 箱式石棺の石組の上に石を積んで壁体を構築する。最大の特徴は壁体最下段により大きな石を原則として立位で使用していることである。箱式石棺との折衷の程度によりさらに細別できる。

a型 箱式石棺の壁体上に板石を置き、上面観を小口積みの竪穴式石室に似せたもの。兵庫県揖保川町養久山1号墳第6主体など⁽¹¹⁾（図76-8）。

b型 壁体の一部を2段以上の積み石で構成するもの。兵庫県出石町田多地3号墳第5主体など⁽¹²⁾（図76-19）。

c型 側壁全体を2段以上の積み石で構成するもの。柿坪中山4号墳第1主体など⁽¹³⁾（図76-14）。

d型 四壁を2段以上の積み石で構成するもの。柿坪中山2号墳第1主体など⁽¹⁴⁾（図76-11）。構造面に認められるこうした細部の違いがいかなる意味を持っているのかという点については、さらに検討の余地がある。後述するように、石棺系小竪穴式石室は箱式石棺が長大な割石積み竪穴式石室の影響を受けて成立したものであると考えるなら、箱式石棺にもっとも近いa型をこの種の石室の原初的な形態としてとらえることができる。そして、b、c、d型の順で構造的には割石を積んだ竪穴式石室との類似度が増していく。

さて、これらの小竪穴式石室のうち、吉福遺跡の石積み小石室は内法長が1m内外という小規模なものであり、また墳丘を持たず集団墓的なあり方を示している点でやや異質な存在といえる。これらをひとまず除いてみると、近畿地方の小竪穴式石室は大部分が石棺系のもので占められる。以下では、主として石棺系小石室の諸要素について検討を加えていくことにする。

(4) 小竪穴式石室の諸問題

石室規模と木棺の有無 考古学本来の用語法からいえば、「石室」の中には別の埋葬容器が納められていなければならない。しかし、小竪穴式石室の多くはそれを可能とするだけの内法が確保されていない。図73には、成人埋葬用と考えられる石室の床面内法を示している。石室の両小口で幅の異なるものは最大値と最小値を結んだ直線で表わしている。これをみるとほとんどの事例で最大幅が55cm未満という値をとる。また最小値は25cm程度である。この25~55cmという数値は、成人の肩部および足部の幅にかなり近いものであり、さらに木棺材の厚みを加えたとしたら石室内に遺体を収容することが困難と思われる規模である。ちなみに、図73には柿坪中山古墳群において小石室と共存している木棺直葬墓の棺の外形規模を併せて表示している。明らかに石室内法よりも大きい値を示しており、この木棺外形規模から棺材の厚さを減じた値

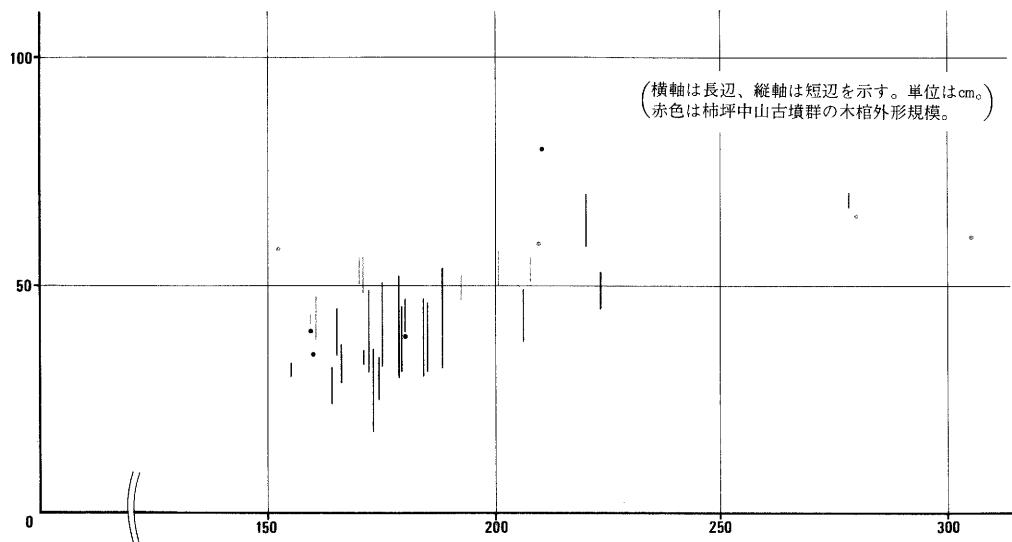


図73 小竪穴式石室の内法

がまさに石室内法の規模に相当することが推定できる。つまり、小石室の大部分は石室自体が機能的には「棺」の役割を果たしているのである。石棺系小石室が箱式石棺を基礎としていることからみても当然のことといえよう。

なお、石室の小口幅が頭側と足側で異なることもこの種の石室に顕著に認められる特徴である。一般に長大な竪穴式石室に見られる同様の差は、内部に納められた割竹形木棺の形状との関連で説明されている。⁽¹⁶⁾ これに対して、内部に木棺が存在しないこれら小石室の平面形は人間の身体の形に合わせた造りであったと考えられる。壁体の上面観だけは長大な竪穴式石室に似せているものの、平面企画の原理はまったく異なるものだったのである。

さて、いま一度図73にもどると、少数例ではあるが最大幅が70cm以上に達するものが存在していることに気づく。兵庫県姫路市横山7号墳、⁽¹⁷⁾ 同県豊岡市中ノ郷深谷1号墳第4主体、⁽¹⁸⁾ 京都府大宮町大内1号墳主体である。横山例については詳細がわからないが、中ノ郷深谷例では石室床面が横断面U字形となるように整えられており、内部に割竹形木棺が置かれていたことが推定されている。また、大内例では石室床面に長さ275cm、北端幅45cm、南端幅35cmの範囲で横断面U字形にくぼむ部分があり、ここに割竹形木棺が据えられていた可能性も考えられている。両者は石室長辺も220cmを超え、石棺系小石室の中でも規模の大きい部類に含まれる。このように、最下段の石を立位で使用するという箱式石棺の手法をとり入れた石棺系石室においても、規模の大きいものの中には内部に木棺を持つ文字どおりの石室機能を担った例も少数ではあるが存在している。規模の点でいうなら、小口幅60cm前後がその境界の目安になろうか。

床面の構造 割竹形木棺を設置するために床面を横断面U字形に整形した例は別として、普

通小石室の床面は平坦に整えられている。地山を削った面をそのまま床面とするもの、砂や土を敷くもの、小礫を敷くもの、板石を敷くものなどさまざまな手法があるが、石室のタイプとの相関関係はうかがわれない。むしろそれぞれの埋葬当事者たちの習俗の違いといえよう。

こうした砂や礫石は基本的には石室内の床面だけに施されている。これは遺体の収納が石室を築き、床面を整えた後に行われたことを示すものであり、木棺を設置した後に壁体の構築が始められる長大型石室とは埋葬の手順を異にしている。

蓋石上面では被葬者の頭位から足位の方向に低くなるような傾斜を持つ例が多いが、床面においては顕著な傾斜が見られないものもかなりある。

分布と展開 図74は近畿地方における小豎穴式石室の分布を示したものである。図中には石棺系小石室と石積み小石室の両者を示しているが、分布はかなり偏っている。すなわち、現状では畿内では南原古墳と松岳山古墳のわずか2例が確認できるだけであり、そのほかは兵庫県および京都府北部に分布域が限られている。なかでも、とくに但馬地域に集中する傾向があることは、発掘件数に地域的な不均衡があるとしてもなお認めることのできる特徴である。

時期的にもっとも遡る例としては、吉福遺跡の石積み小石室と養久山1号墳の石棺系a型小石室などがあげられる。弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての築造である。吉福例は河原石を積み上げるタイプであり、規模の小さい点などを除けば広島市西願寺遺跡などで検出されている同時期の小豎穴式石室と類似している。⁽²⁰⁾ ただ、多数派である石棺系の小石室の祖形とするには構造的な隔たりが大きい。

これに対して、養久山1号墳第6主体などは、箱式石棺の石組の上面に別の板石を平積みして、あたかも積み石で構築した豎穴式石室のような上面形を呈しており、石棺系小石室全般に通じる構造を有している。養久山1号墳は全長約31mの前方後円墳であり、後円部中央には長さ407cm、幅102～112cmの塊石、割石を積み上げた豎穴式石室

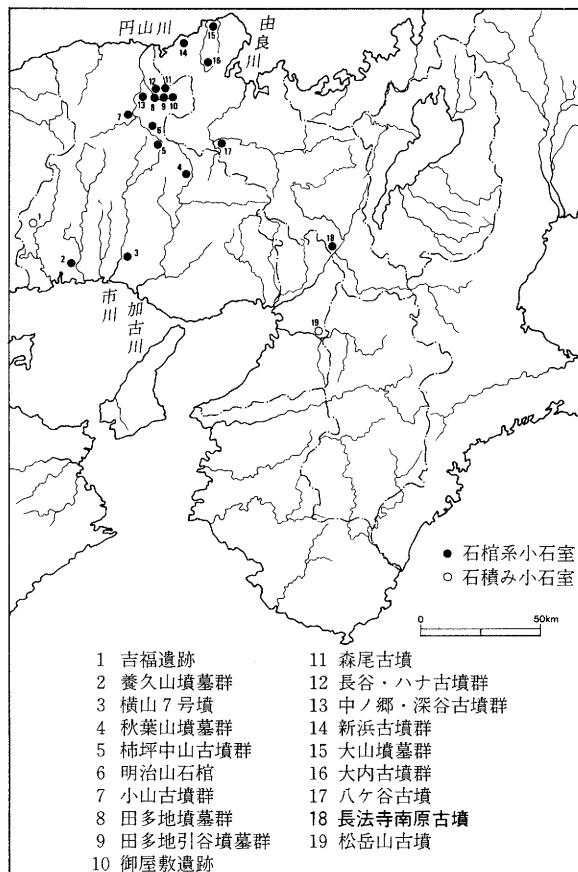


図74 小豎穴式石室の分布

が築かれている。したがって、おなじくこの古墳に設けられた石棺系小石室が、中心主体の豎穴式石室の形態を参照した可能性は十分考えられるのである。養久山1号墳の各主体部の蓋石は幾重にも入念に施されている。箱式石棺を組み立てて残った石材は蓋石として使用すれば有用であるにもかかわらず、とくに箱式石棺の壁体上面に重ね積みしている点からみても、こうした造作が目的を持って意識的になされたことを物語っている。つまり、近畿地方における石棺系小豎穴式石室の源の一つが播磨地方に存在していることが推定されるのである。

しかし、この地方においてその後の石棺系小石室の展開は不明瞭である。いっぽう但馬地方でも古墳時代前期からかなりの類例を知ることができる。山東町柿坪中山古墳群、出石町御屋敷遺跡、同町田多地引谷墳墓群などにみられる石棺系小石室は4世紀代まで遡るものと考えられる。また、当地方では正始元年銘三角縁神獣鏡をはじめ古式の遺物を出土した出石町森尾古墳でも、細部の構造は不明ながら小豎穴式石室の存在が推定されている。⁽²³⁾ 養久山墳墓群の存在する播磨西南部の集団と但馬地方の集団との間に埋葬施設にかんする情報交換があったか否かはにわかに結論を出せる問題ではない。ただ、この種の小石室が市川～円山川流域、あるいは加古川～由良川流域といった瀬戸内と日本海側を結ぶルート上に点在していることは示唆的である。石棺系小石室は箱式石棺の構造を基礎としているから、その分布域は当然のことながら箱式石棺分布域と重なる傾向にある。しかしながら、但馬以西の日本海側の地方では、箱式石棺は多く分布するにもかかわらず石棺系小石室の存在は顕著でない。これに対して播磨を含む東部瀬戸内は弥生時代終末期には箱式石棺の分布がすでにみられ、さらに古墳時代前期にかけて多数の豎穴式石室が築かれる地域である。石棺系小石室はまず豎穴式石室の外観を箱式石棺にとり入れることによって成立したと考えられる。養久山墳墓群にみられるような初期の石棺系a型小石室が河川の流域を上って但馬地方やその周辺に伝播したことも想定できよう。もっとも、長大な豎穴式石室を築く葬送儀礼に参列した但馬地方の有力層が石棺系小石室を独自に考案した可能性もないとはいえない。いますこし調査事例が増加するのを待ちたい。

いずれにせよ、現状の分布をみる限り近畿地方の小豎穴式石室は播磨と但馬を結ぶ市川～円山川流域を中心として丹後、丹波の一部に分散している状況が指摘できる。南原古墳例と松岳山古墳例はこのような分布からはかけ離れた位置に存在している。とくに松岳山古墳例は最下段から板石を平積みにする石積み小豎穴式石室であり、但馬地方を中心とする石棺系小石室とは構造的には異なるものである。さらに別の地域との関連を考える必要があろう。

石棺系小豎穴式石室と木棺直葬墓 但馬地方の古墳時代前期の成人用埋葬施設には木を使ったものと石を使ったものがみられる。これらがどのように使い分けられていたかという点はまだ十分解明されていない。現在までに調査された資料をみる限りでは、木製の埋葬施設に葬られた者と石で造ったそれを使う者との間に、年齢、性別、階層による顕著な差異を見いだすことはできない。むしろ埋葬施設の違いは個々の古墳を造営した家族集団それぞの習俗の違

いとして説明しうる可能性がある。ここでは小竪穴式石室を含む石を使った埋葬施設と木棺墓とを対比させながら検討を進めよう。

八鹿町小山3号墳は直径25mの円墳であるが、墳丘頂部には小竪穴式石室2基、箱式石棺2基、土器棺3基が當まれており、しかも土器棺のうち1基は石棺様の石囲いを持つものであった。⁽²⁵⁾ 4世紀後半にこの古墳を築造した集団には石を使った埋葬施設への強い指向がうかがえるのである。これに対して、5世紀初頭前後から造営が始まる豊岡市北浦古墳群においては調査された50基を超える埋葬施設の大半が木棺墓で占められている。木棺を使用する習俗を持った集団の墓域といえるだろう。⁽²⁶⁾

木棺と石棺の両者が用いられている古墳群もある。豊岡市長谷ハナ古墳群では8基の古墳のうち6基の主体は木棺墓であるが、1—1号墳と5号墳の2基は箱式石棺を内部主体としている。⁽²⁷⁾ 同じ尾根上に古墳を築く集団の中にもこのような違いがみられることから、埋葬施設にかんする習俗は家族集団レベルで決定されていた可能性が高い。一つの墳丘上に木棺、石棺の両者が混じりあっている例もみられる。たとえば、田多地3号墳においては墳丘裾部の埋葬施設も含めて15基の主体部が設けられているが、その内訳は木棺墓・土壙墓12基、小竪穴式石室2基、箱式石棺1基であり、多数派を占める木棺墓のなかに石を使った埋葬施設が少数派として混在している。⁽²⁸⁾

異なるタイプの埋葬施設が同じ墓域内に存在することは弥生時代の遺跡においても認められるところである。かつて筆者は、弥生時代の共同墓地における木棺型式を検討し、墓地内で少數派型式の木棺被葬者は出自の異なる他集団からの移入者であると考えた。⁽²⁹⁾ 上述したような但馬地方の古墳時代埋葬施設のありかたをみると、埋葬施設が被葬者の出自を反映するという原理が、少なくとも小古墳を築くような有力層以上の階層では依然として存続していた可能性が高いといえよう。

石棺系小竪穴式石室の階層性 石材を使った埋葬施設と木棺墓との使い分けは、それぞれの家族集団の習俗として選択される事柄であったと考えられる。その意味では両者の材質の違いには被葬者の身分的上下関係を示すような性質の差異はなかったとみてよい。差異はむしろ木棺墓どうして、あるいは石材を使った埋葬施設どうしの間で顕在化する。木棺墓の場合その要素の一つとしては木棺の規模が考えられる。前述の田多地3号墳では第10主体のように木棺規模1.6m程度のものから第2主体の3.3mの棺に至るまで大小の差が存在する。これに対して、石材を使用する埋葬施設においてはこれほどの規模の違いが認められない点が特徴である。この場合には埋葬施設の規模そのものよりも、石材にどの程度加工を施しているか、いかに入念な構造に造るかといった側面が被葬者の社会的性格を反映する要素になると考えられる。⁽³⁰⁾ 石棺系小竪穴式石室は、石材を使った埋葬施設を用いる集団のなかで社会的にやや有力な地位にある者の墓として、箱式石棺を基礎に長大な竪穴式石室の外觀のみをとり入れて造られた埋葬施設

と理解することができるのである。

ところで、田多地3号墳などの小古墳でも木棺には全長3mを優に超えるものがあるので対して、石棺系小石室となると2mを超える例さえ稀である。もし石材さえ確保できるならば長大な石棺系石室を構築することは技術的にさほど困難なことではあるまい。にもかかわらず、同時期のほぼ同様の階層で用いられた木棺なみの規模さえも確保できていないことは、当時の石室規模には木棺と比べてかなり厳密な秩序と規制が貫かれていたことをうかがわせるものである。秩序とはここでは石室規模によって首長の地位の上下が表現されるシステムである。長大な豎穴式石室は、当時の政権の中枢にかかわる大首長の埋葬施設として位置づけられたものであった。地域の有力層が自己の判断で簡単に石室規模を増大できる状況にはなかったと考えられるのである。

石棺系小石室からはついに長大な豎穴式石室が生まれることはなかった。古墳時代の「棺制」ともいべき秩序をふまえてこの事実をみると、そこには地域内の有力層の埋葬施設として認定されるべきこの種の小石室の階層性が端的に表われているといえる。兵庫県山南町に全長48m、丹波地方有数の前期の前方後円墳である丸山1号墳⁽³¹⁾が存在している。後円部に割石小口積みの長大な豎穴式石室を持つこの古墳の前方部に1基の石棺系石室が構築されている。内法長366cm、幅51cmをはかる近畿地方最大の石棺系石室が前方部埋葬として設けられているあたりに、当地方の石棺系石室の階層的な限界をみることができるであろう。

(5) 南原古墳における小豎穴式石室の存在意義

前項では、おもに石棺系の小石室をとりあげて検討し、これが中小古墳を築くような有力層の埋葬施設として、近畿地方では但馬を中心に播磨、丹波、丹後などに分布域を広げていることを示した。では、こうした性格を持つ埋葬施設が南原古墳に存在していることにはどのような意味が認められるであろうか。

南原古墳の小豎穴式石室構造 南原古墳前方部から検出された小豎穴式石室は、東半部がすでに破壊されていたが、残存部分の情報によってほぼ構造を知ることができる。詳細は第3章に述べたとおりであるが、その特徴をいま一度確認すると、壁体は最下段に大きな石を立位で使用してその上に角礫を平積みする、床面には小角礫を敷く、西側に排水溝を取り付けるなどの点があげられよう。規模については墓壙底部東端で確認された掘り込みを小口石据え付けのためのものと考えると、石の厚みを勘案して内法長170cm程度に復元できる。幅は西端部で30cmと狭く、こちらを足部としても内部に木棺が収納された可能性は低い。また、主軸はN77°Eで石室幅や排水溝の位置からみて頭位は東と推定される。

このような構造を持つ石室はまさに石棺系小石室としてとらえられるものである。しかし、畿内の前期古墳においてこれまでに石棺系小石室が検出された例はこの南原古墳以外にはみら

れず、きわめて異例の存在である。

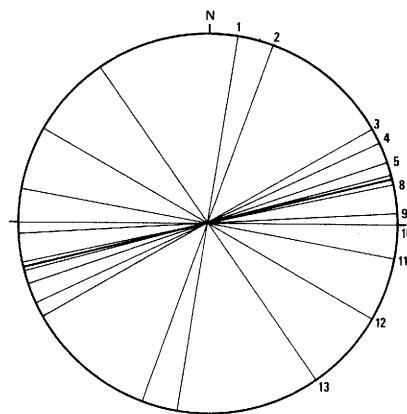
埋葬施設と被葬者の出自 長大な竪穴式石室は、首長の地位の上下を地域を越えた全国レベルの秩序のなかで表現するための埋葬施設であると考えられる。これに対して石棺系小石室は前項で述べたように地域内の習俗に根づいた埋葬施設であり、ほんらい地域を大きく飛び越えて点的に存在する性質を持つとは認めにくい。石棺系小石室をこのように理解する時、南原古墳に小石室が存在する理由は、被葬者がこの種の埋葬施設を使用する他地域の集団と深い関連を有する人物であったという推定がもっとも妥当であろう。具体的にいえば、そうした他地域の集団から婚姻などによって山城南部のこの乙訓地域に移入してきた人物を想定しうるのである。畿内にないタイプの埋葬施設をわざわざ採用したのはそれが出身集団において使用されていた埋葬施設だったからである。

弥生時代には埋葬施設の形式は集団ごとに決められており、婚姻などによる集団間の人間交流があった場合でも移入者は出身集団で使っていた形式の埋葬施設に葬られるため、共同墓地の中には両者が混在するといった現象がみられた。古墳時代になっても有力層においては依然としてこうした原則が守られていたと考えられる。⁽³²⁾ というよりもむしろ、この時代には婚姻 자체が、首長間の政治的同盟関係を締結あるいは維持していく際の手段のひとつとしてしばしば利用されていたとみる方が正しいであろう。故人の葬送儀礼の場はそうした関係の確認、表示にとって重要な役割を担ったはずである。南原古墳においては他地域の埋葬施設ともいえる石棺系小石室を構築することにこそ大きな意味があったのである。埋葬頭位をも念頭において周到に造られた小石室ではあったが、ただひとつ、短いながらも排水溝を取り付けている点はふつうの小石室には見られない特徴である。前方部埋葬とはいえ、畿内の首長墓の墳丘上に造られるだけの入念さを備えたものといえようか。

南原古墳小石室の被葬者像 では、この小石室に葬られた被葬者の出身地はどこに求められるであろうか。小石室は前方部頂部に墳丘主軸とほぼ直交する方向で設けられており、墳丘主軸との関係は後方部竪穴式石室とは異なる。立地の条件からみても、幅の狭い前方部頂で主軸直交方向に構築すべき利点はとくに認められないにもかかわらず、あえてこれを実行している理由には、埋葬頭位との関連が考えられる。

畿内においては前期の首長墓の埋葬頭位が北優位となることが指摘されており、南原古墳の後方部竪穴式石室も南北主軸でこの原則にかなっている。⁽³³⁾ また、埋葬頭位と方位との関係には地域によってさまざまな傾向が存在することも判明している。そこで、近畿地方で石棺系石室が多く用いられている但馬地方とその周辺の、前期の首長墓およびそれに準ずる古墳の埋葬施設主軸方位を示したものが図75である。⁽³⁴⁾

これをみればこの地方では埋葬施設の主軸が東西優位となる傾向のあることがわかる。首長層の地域間交流、政治的同盟関係などのありかたによっては、地域の傾向とは異なる頭位をと



1 兵庫県伊和中山1号 8 兵庫県北浦18号
 2 京都府経子山1号 9 兵庫県城の山
 3 京都府大谷 10 兵庫県森屋
 4 兵庫県丸山1号南石室 11 京都府園部垣内
 5 兵庫県丸山1号北石室 12 京都府広峯15号
 6 京都府権現山 13 京都府作り山1号
 7 京都府長法寺南原

図75 但馬地方周辺の埋葬施設の埋葬施設主軸

これが石材を用いた埋葬施設であるならば、発掘事例としても目につきやすい。

畿内およびその周辺の古墳を見渡せば、南原古墳をはじめとして、地域内の伝統では説明しきれない埋葬施設を設けている例が少数ながら認められる。神戸市処女塚古墳前方部斜面の箱式石棺、同市天王山5号墳主体部の箱式石棺、茨木市將軍山古墳裾部の箱式石棺、枚方市楠葉古墳主体部の箱式石棺、柏原市松岳山古墳クビレ部テラスの小豎穴式石室と箱式石棺などである。⁽³⁵⁾ ⁽³⁶⁾ ⁽³⁷⁾ ⁽³⁸⁾ ⁽³⁹⁾ 長大な豎穴式石室は別として、石材を使ったこうした小規模な埋葬施設は畿内ではきわめて例外的な存在である。

上に例示した古墳の多くが、畿内以外の地域とのつながりをうかがわせる要素を持っている点は示唆的である。処女塚古墳から出土した山陰系の土器、將軍山古墳の豎穴式石室に使われた結晶片岩、一部に鷺の山石を使用した松岳山古墳の後円部石棺などがそれにあたる。つまり、これらが示す被葬者の出身地域、出身集団で使用されていた埋葬施設が畿内地方に持ち込まれたものとして解釈できるのである。小児棺の場合はその親の出身地との関連が考えられよう。現状ではまだ確認された例は少ないが、今後前方後円（方）墳の墳丘や墳丘周辺の調査が進めば、こうした事例の増加が予想される。

(7) 結語

南原古墳の小豎穴式石室をとりあげて、古墳時代の埋葬施設が持つ性格を検討した。古墳時代の有力層の埋葬施設としては、首長墓の長大な豎穴式石室のように地域を越えた身分秩序を示すものと、小豎穴式石室や箱式石棺、小規模な箱形木棺のように地域内の家族集団レベルの

埋葬施設が造られることが考えられる。このような見方に立つと、南原古墳の前方部被葬者としては石棺系小豎穴式石室を使い、東西方向の埋葬頭位を選ぶような地域の出身者であり、後円部被葬者との婚姻などによってやって来た乙訓の地で生涯を終えた人物像を想定できる。近畿地方でその出身地を捜すなら、但馬地方周辺が有力候補のひとつになりうるであろう。

(6) 首長層の地域間交流と埋葬施設構造

首長層の婚姻関係には政治的な意味合いが含まれていたであろう。それにともなって異なる地域の埋葬習俗が移動することもしばしば起こりえたと考えられる。埋葬施設が木棺であった場合には、腐朽して細部の構造がわからないため形態的な議論が進めにくいが、そ

習俗を表わすものが存在している。南原古墳の小石室は埋葬施設としては後者の性格を持つものであるが、婚姻などによって地域を越えた人間交流が行われた場合にはこうした埋葬施設を用いる伝統のない地域においても、例外的に存在することがありえたのである。この時代、特に首長層にとっては、どのような地域勢力と関係を取り結ぶかという選択が自らの集団の浮沈にかかわる重要な政治問題であったと考えられる。他地域とつながりの深い埋葬施設を営むことは、葬送儀礼の場を利用してこうした諸関係を広く顯示する役割をも担った行為であったといえるのである。

注

- (1) 小林行雄「豎穴式石室構造考」(『紀元二千六百年記念史学論文集』京都帝国大学文学部、1941年)。のち『古墳文化論考』(平凡社、1976年)に再録。
- (2) 福岡県炭焼5号墳などが調査の早い例である。柳田康雄編『炭焼古墳群 筑紫郡那珂川町大字中所在方形周溝墓の調査』福岡県教育委員会、1968年。
- (3) 上野精志編『七夕池遺跡群発掘調査概報』志免町文化財調査報告書第1集 志免町教育委員会、1974年。
山中英彦『東宮ノ尾古墳群』東宮ノ尾古墳群発掘調査団、1974年。
- (4) 小田雅文「野田東部7号墳主体部について」(小田ほか編『柿原野田遺跡』柿原野田遺跡調査団、1976年)。
木下修ほか「原古墳群」(木下ほか編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡県教育委員会、1976年)。
中間研志「豎穴式石室・石棺系豎穴式石室」(中間編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告6 甘木市所在柿原古墳群の調査II』福岡県教育委員会、1986年)。
なお、柿原古墳群の事例を検討した中間は、四壁を小口積みで構築する小規模な豎穴式石室が逆に箱式石棺の影響を受けた結果、石棺系石室(氏は石棺系豎穴式石室とよぶ)が生まれた場合も考えられるとする。
- (5) 名本二六雄「豎穴式石室A群小論—広島県の例を中心に—」(『遺跡』第23号 遺跡発行会、1983年)。
- (6) 都出比呂志「豎穴式石室の地域性の研究」大阪大学文学部国史研究室、1986年。
- (7) 加古千恵子「内部構造」(樋本誠一、加古編『柿坪中山古墳群 第2集』山東町教育委員会、1978年)。
- (8) 都出『豎穴式石室の地域性の研究』(注6文献) p.11、図2。
- (9) 石野博信ほか「播磨・吉福遺跡—古墳時代前期集団墓の調査—」(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集 兵庫県教育委員会、1974年)。
- (10) 桑野一幸『松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報 1986年度』柏原市教育委員会、1987年。

- (11) 近藤義郎編『養久山墳墓群』揖保川町教育委員会、1985年。
- (12) 森内秀造ほか『田多地古墳群 田多地経塚群Ⅰ』出石町教育委員会、1985年。
- (13) 横本、加古編『柿坪中山古墳群 第2集』(注7文献)。
- (14) 横本誠一編『柿坪中山古墳群 第1集』山東町教育委員会、1975年。
- (15) 形態面からみてa型の成立が早いとしても、a型にも時期のくだるものがある。型式学的にはa型→d型への変遷が辿れるであろうが、この違いは構造的にどれだけ入念に造るかという違いであり、階層差、地域性も含めてもう少し検討する必要がある。
- (16) 『古墳文化論考』(注1文献) p.169。
- (17) 近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店、1983年。
- 『定型化する古墳以前の墓制』(第24回埋蔵文化財研究集会資料)、1988年。
- (18) 濑戸谷皓編『中ノ郷・深谷古墳群』但馬考古学研究会、1985年。
- (19) 波多野徹、久保哲正編『大内1号墳発掘調査概報』大宮町教育委員会、1983年。
- (20) 金井亀喜編『西願寺遺跡群』広島県教育委員会、1974年。
- (21) 前田豊邦「御屋敷遺跡」(『出石町史』第3巻 資料編Ⅰ 出石町、1987年)。詳しい図面等は未公表であるが、堅穴式石室1号出土の四獸鏡は古式の仿製鏡と思われる。
- (22) 『田多地引谷墳墓群現地説明会資料』出石町教育委員会、1989年。
- (23) 濑戸谷皓「森尾古墳の再検討」(瀬戸谷編『北浦古墳群』豊岡市教育委員会、1980年)。
- (24) 播磨地方の弥生時代終末期の墳墓である揖保川町養久山5号墓や姫路市山戸4号墓では小石室の中に土器棺を納める埋葬法がみられるが、近年但馬地方においても八鹿町小山3号墳、同町源氏山1号墳などで土器棺のまわりに石棺状の石囲いを設ける古墳時代前期の埋葬施設が検出されているのは興味深い。今後両者の関係を検討する必要がある。

養久山5号墓は『養久山墳墓群』(注11文献)、山戸4号墓は『定型化する古墳以前の墓制』(第24回埋蔵文化財研究集会資料、1988年)、小山3号墳、源氏山1号墳については、谷本進、山田宗之編『小山古墳群・東家の上遺跡』(八鹿町教育委員会、1990年)を参照。

- (25) 谷本、山田編『小山古墳群・東家の上遺跡』(注24文献)。なお、八鹿町教育委員会谷本進氏から同町域の古墳について有益な御教示を得た。
- (26) 濑戸谷皓編『北浦古墳群・立石墳墓群』豊岡市教育委員会、1987年。
- (27) 濑戸谷皓編『長谷・ハナ古墳群』但馬考古学研究会、1984年。
- (28) 森内ほか『田多地古墳群 田多地経塚群Ⅰ』(注12文献)。
- (29) 福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」(『考古学研究』第32巻第1号、1985年)。
- (30) 豊岡市中ノ郷深谷2号墳の箱式石棺は丁寧に加工した石材でつくられ、特製の石枕も設置されている。石室構造は持たないが、入念な造りである。瀬戸谷編『中ノ郷・深谷古墳群』(注18文献)。
- (31) 山本三郎、井守徳男『丸山古墳群—調査の概要—』山南町、1977年。
- (32) 福永伸哉「共同墓地」(都出比呂志編『古代史復元』6 講談社、1989年)。

- (33) 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」(『考古学研究』第26巻第3号、1979年)。ただし、南原古墳の後方部石室の埋葬頭位は南頭位である可能性も残っている。
- (34) 中小の古墳の多くは尾根筋や等高線の方向に合わせて埋葬頭位が変化する。埋葬頭位と絶対方位の検討は、原則として前方後円墳などの首長墓や尾根筋の方向に左右されない丘陵頂部に築かれた規模の大きい古墳においてのみ有効である。
- (35) 『史跡処女塚古墳』神戸市教育委員会、1985年。
- (36) 『天王山古墳群5・6号墳現地説明会資料』神戸市教育委員会、1988年。
- (37) 堅田直「將軍山古墳調査概報」(『大阪市立博物館報』No.4 大阪市立博物館、1965年)。
- (38) 北野耕平「楠葉古墳」(『枚方市史』第6巻、1968年)。
- (39) 桑野『松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報 1986年度』(注10文献)。

表3 近畿地方の小堅穴式石室集成表（古墳時代前期）

遺跡名 (所在地)	図番	墓壙規模 (長×幅×深) (cm)	石室内法 (長×幅×深) (cm)	壁体 構造	床面 施設	主軸 方位	副葬品	被葬者	文献
吉福遺跡 (兵庫県佐用町)	石室1	1	210×156×95	115×60×—	積(円)		N12W		①
	石室3	2	128×100×55	77× ²⁷ ₂₄ ×42	積(円)		N3W		
	石室4	3	165×115×40	100×30×—	積(円)		N88E		
	石室5	4		—×26×—	積(円)				
	石室8	5		160×40×—	棺d		N54W		
養久山墳墓群 (兵庫県揖保川町)	1号墳第2主体	6	180×110×90	60× ²⁷ ₂₆ × ²⁶ ₂₂	棺a	小円礫	N11E	剣	②
	〃第3主体	7	—×160×140	180× ⁴⁷ ₄₀ × ²⁰ ₁₅	棺a		N13E	剣、斧、ガラス玉	
	〃第6主体	8	—×215×117	180× ⁴⁶ ₃₂ × ¹⁹	棺a	小円礫	N87E	鎧	
横山7号墳 (兵庫県姫路市)			210×80×110						③
秋葉山墳墓群 (兵庫県和田山町)	2号墳第2主体	9	405×257×138	185× ⁴⁶ ₃₁ × ³⁵ ₂₅	棺b		N78W	刀、鎧	④
	〃第4主体	10	334×180×125	179× ⁵² ₃₀ × ³⁰ ₂₅	棺b		N75W		
柿坪中山古墳群 (兵庫県山東町)	2号墳第1主体	11	315×245×95	171× ³⁶ ₃₃ × ²⁵	棺d	小石			⑤
	1A号墳第1主体	12		59× ³⁰ ₂₆ × ²⁷	棺d		N35E		
	3号墳主体	13	495×295×137	188× ⁵⁴ ₃₃ × ³²	棺d	小円礫	N39E	剣、鎌	
	4号墳第1主体	14	395×270×135	165× ⁴⁵ ₃₀ × ⁴⁰	棺c	板石	N14E	剣、鎌、斧、針	
明治山石棺 (兵庫県氷上町)		15	320×190×85	175× ⁵⁰ ₃₂ × ³⁰ ₂₄	棺a	板石	N46E	鎧	♀?
小山古墳群 (兵庫県八鹿町)	3号墳第1主体	16	398×278×204	155× ³³ ₃₀ × ³⁸	棺c	板石	N83E	鎌、鎧	⑦
	〃第2主体	17	359×282×118	173× ³⁶ ₁₈ × ³²	棺c	小円礫	N87E	剣、鎧	
	〃第7主体	18	149×99×43	97× ²⁴ ₁₇ × ²⁰ ₁₅	棺a		N89W	鎌	
田多地墳墓群 (兵庫県出石町)	3号墳第5主体	19	328×184×87	166× ³⁸ ₂₇ × ³⁴	棺b		N90E	鎧	⑧
	〃第6主体	20	435×284×100	164× ³² ₂₄ × ²² ₁₆	棺b		N81W	剣	

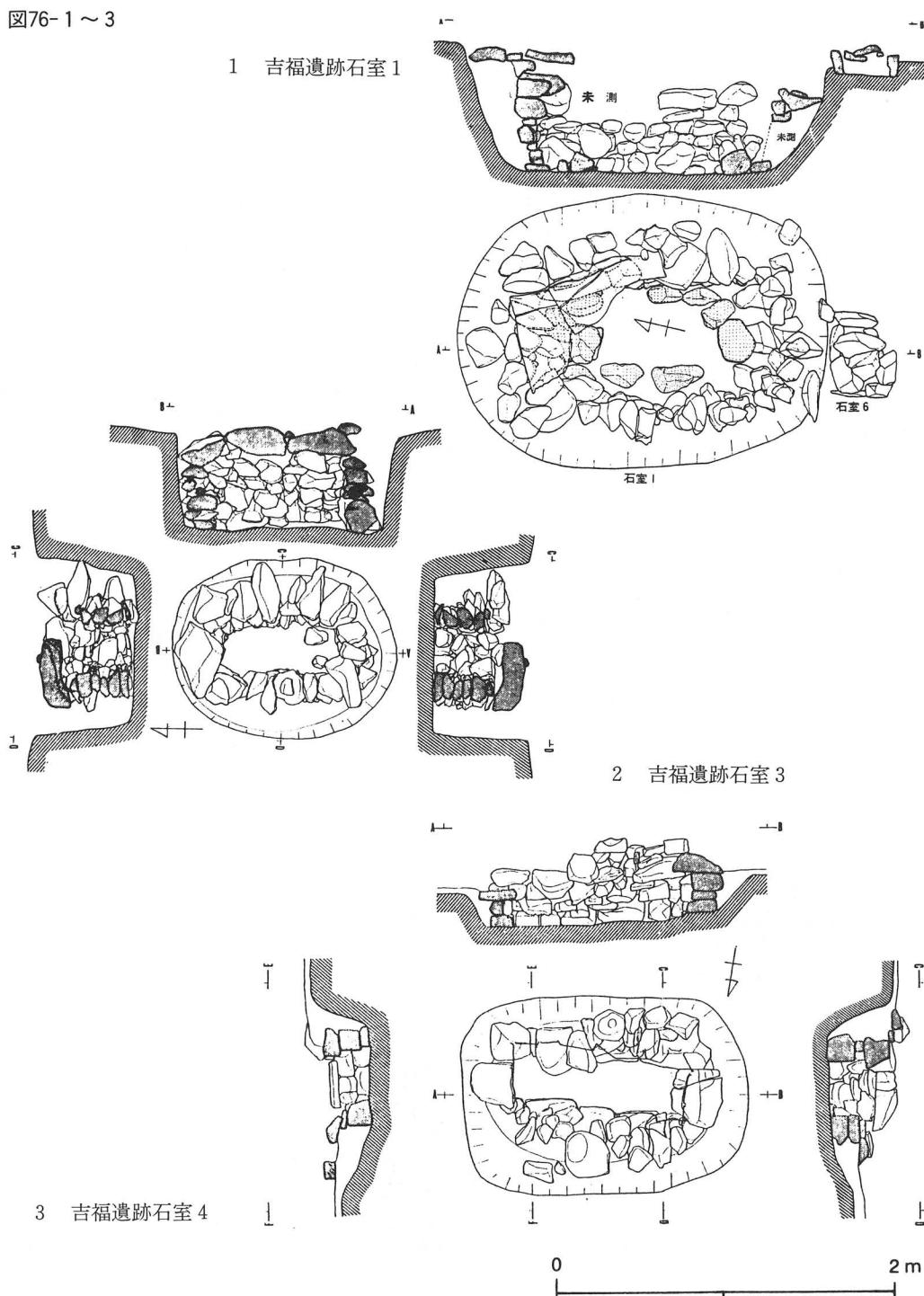
遺跡名 (所在地)		図番	墓壙規模 (長×幅×深) (cm)	石室内法 (長×幅×深) (cm)	壁体 構造	床面 施設	主軸 方位	副葬品	被葬者	文献
田多地引谷墳墓群 (兵庫県出石町)	数基あり									⑨
森尾古墳 (兵庫県出石町)	可能性あり									⑩
御屋敷遺跡 (兵庫県出石町)	2号主体		420×310×—	172× ⁴⁹ ₃₁ ×—	棺c			鏡、刀子、管玉 桶、ガラス玉		⑪
	3号主体		350×270×—	206× ⁴⁹ ₃₈ ×—	棺c			鏡、ガラス玉		
長谷・ハナ古墳群 (兵庫県豊岡市)	5号墳第1主体	21	325×225×80	175× ³² ₂₅ ×25	棺d		N22W			⑫
中ノ郷・深谷古墳群 (兵庫県豊岡市)	1号墳第4主体	22	395×230×75	220× ⁷⁰ ₅₉ ×45	棺b		N85E	鏡		⑬
	〃第5主体	23	400×230×—	—×45×26	棺c		N80E	鉢		
新浜古墳群 (京都府網野町)	2号墳主体	24		175×38×28	棺a		N37E			⑭
	3号墳主体	25	—×160×65	185× ⁴⁷ ₄₀ ×20	棺a		N77E	剣		
大山墳墓群 (京都府丹後町)	10号墳第3主体	26	455×235×87	223× ⁵³ ₄₅ ×70	棺d		N48W	鉄片		⑮
大内古墳群 (京都府大宮町)	1号墳主体	27	470×290×50	278× ⁷⁰ ₆₇ ×45	棺d		N17W	剣、斧、鎌、鉈 刀子		⑯
八ヶ谷古墳 (京都府福知山市)	第3主体	28	310×150×—	180×40×40	棺a	小円礫	N5E			⑰
長法寺南原古墳 (京都府長岡京市)	前方部主体	29	230×100×—	—×30×—	棺d	N77E				⑱
松岳山古墳 (大阪府柏原市)	クビレ部埋葬	30		160×35×—	積(割)	板石	N59W			⑲

近畿地方における古墳時代前期（一部中期前半のものを含む）の小竪穴式石室を示した。壁体構造欄の棺aとは石棺系a型小石室、積（円）は円礫を使った石積み小石室、積（割）は割石を使った石積み小石室を表わす。図番は図76の集成図中の番号を示す。

〈文献一覧〉

- ①石野博信ほか「播磨・吉福遺跡—古墳時代前期集団墓の調査—」(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集 兵庫県教育委員会、1974年)。
- ②近藤義郎編『養久山墳墓群』揖保川町教育委員会、1985年。
- ③近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店、1983年。
- 『定型化する古墳以前の墓制』(第24回埋蔵文化財研究集会資料)、1988年。
- ④藤井祐介ほか『秋葉山墳墓群』和田山町教育委員会、1978年。
- ⑤櫃本誠一、加古千恵子編『柿坪中山古墳群 第2集』山東町教育委員会、1978年。
- 櫃本誠一編『柿坪中山古墳群 第1集』山東町教育委員会、1975年。
- ⑥櫃本誠一ほか「氷上郡氷上町明治山箱式石棺の調査」(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集 兵庫県教育委員会、1974年)。
- ⑦谷本進、山田宗之編『小山古墳群・東家の上遺跡』八鹿町教育委員会、1990年。
- ⑧森内秀造ほか『田多地古墳群 田多地経塚群I』出石町教育委員会、1985年。
- ⑨『田多地引谷墳墓群現地説明会資料』出石町教育委員会、1989年。
- ⑩梅原末治「出石郡神美村の古墳」(『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第2集、兵庫県、1925年)。
- 瀬戸谷皓「森尾古墳の再検討」(瀬戸谷編『北浦古墳群』豊岡市教育委員会、1980年)。
- ⑪前田豊邦「御屋敷遺跡」(『出石町史』第3巻 資料編I 出石町、1987年)。
- ⑫瀬戸谷皓編『長谷・ハナ古墳群』但馬考古学研究会、1984年。
- ⑬瀬戸谷皓編『中ノ郷・深谷古墳群』但馬考古学研究会、1985年。
- ⑭杉原和雄、三浦到「新浜2・3号墳発掘調査概要」(高橋美久二ほか編『林遺跡発掘調査報告書』網野町教育委員会、1977年)。
- ⑮常盤井智行、黒田恭正編『丹後大山墳墓群』丹後町教育委員会、1983年。
- ⑯波多野徹、久保哲正編『大内1号墳発掘調査概報』大宮町教育委員会、1983年。
- ⑰平良泰久「八ヶ谷古墳」(常盤井智行ほか編『丹波の古墳I—由良川流域の古墳—』山城考古学研究会、1983年)。
- ⑱福永伸哉ほか「長法寺南原古墳第6次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第24冊 長岡京市教育委員会、1990年)。
- ⑲桑野一幸『松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報 1986年度』柏原市教育委員会、1987年。

図76-1～3



古墳時代前期(一部中期前半を含む)の小石室のうち図が公表されているものを集成した。出典は〈文献一覧〉にあげたが、一部改変あるいは再トレスしたものもある。縮尺は40分の1に統一した。

図76 近畿地方の小竪穴式石室集成図

図76-4～6

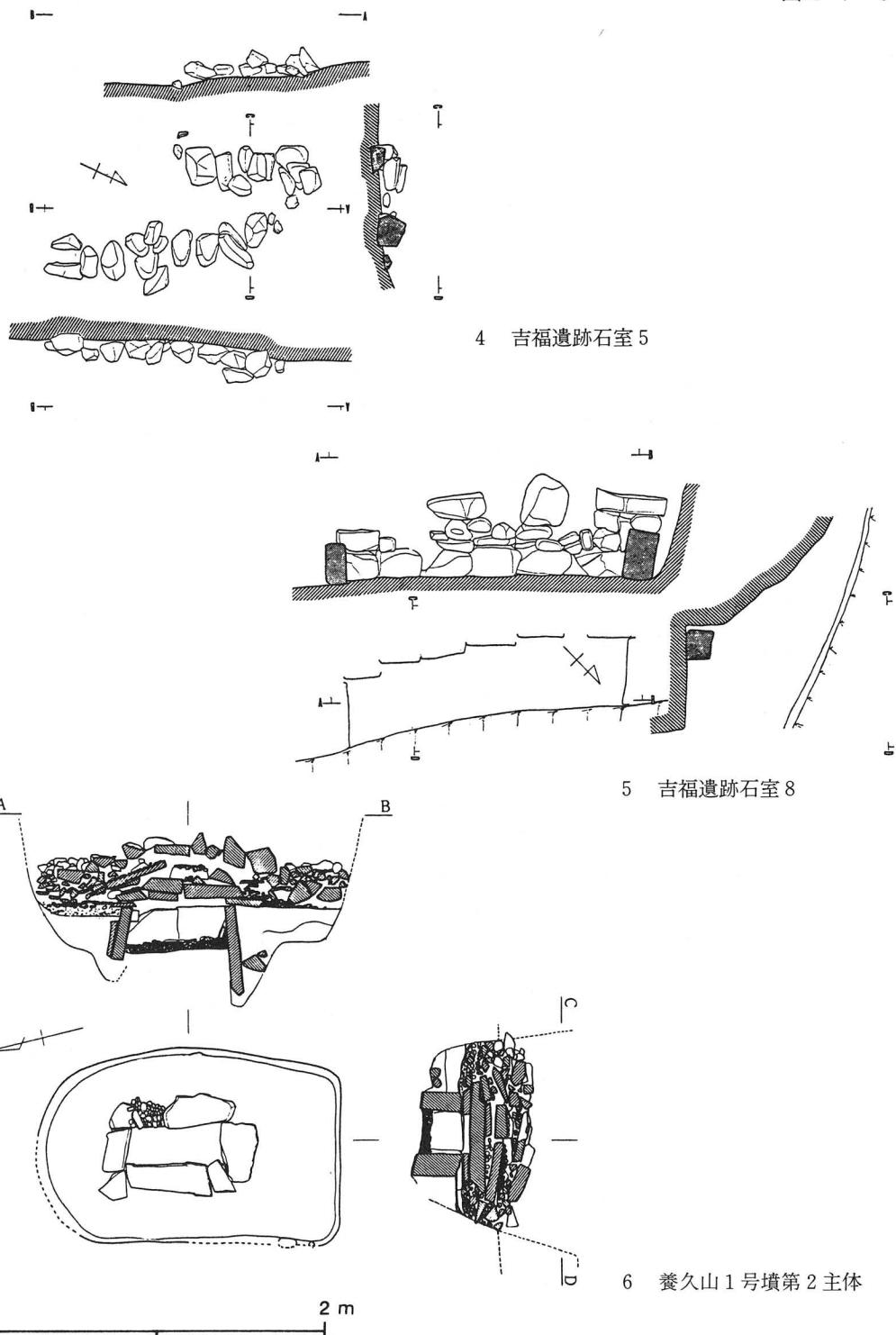
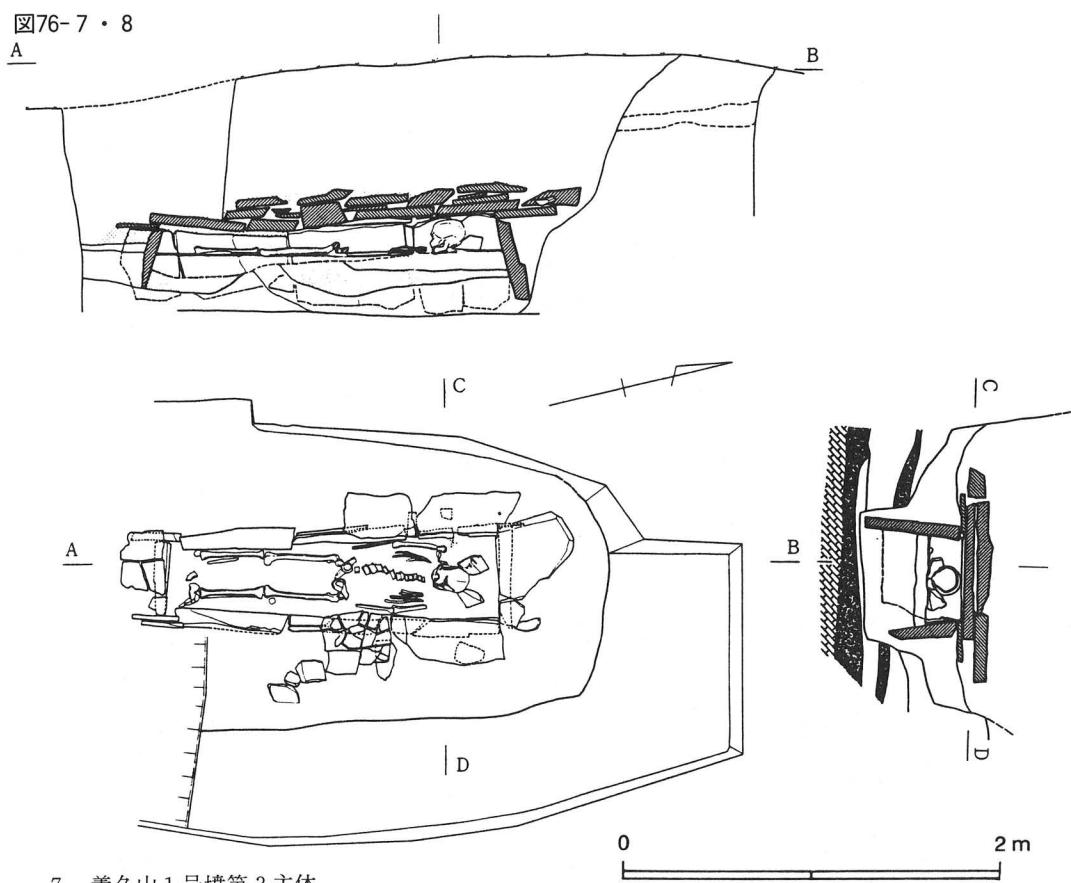
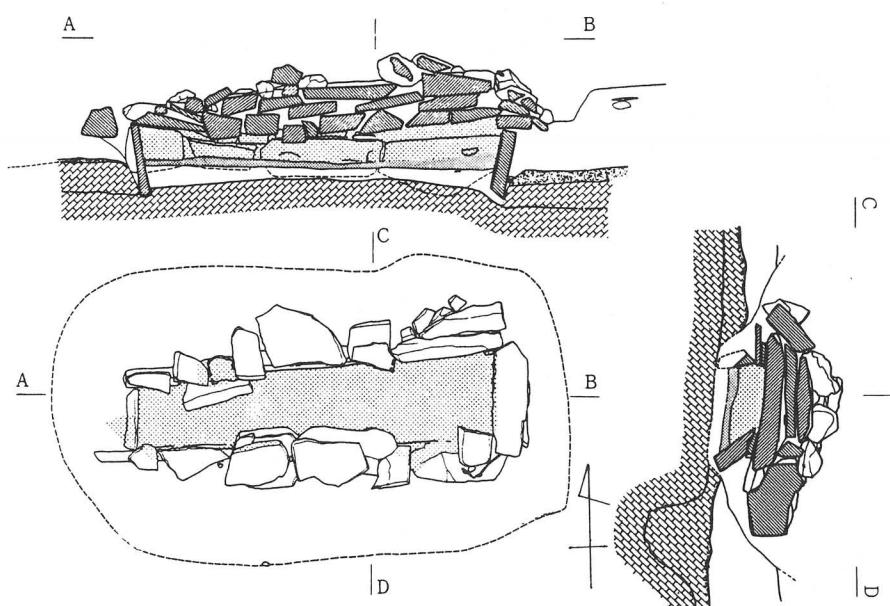


図76-7・8

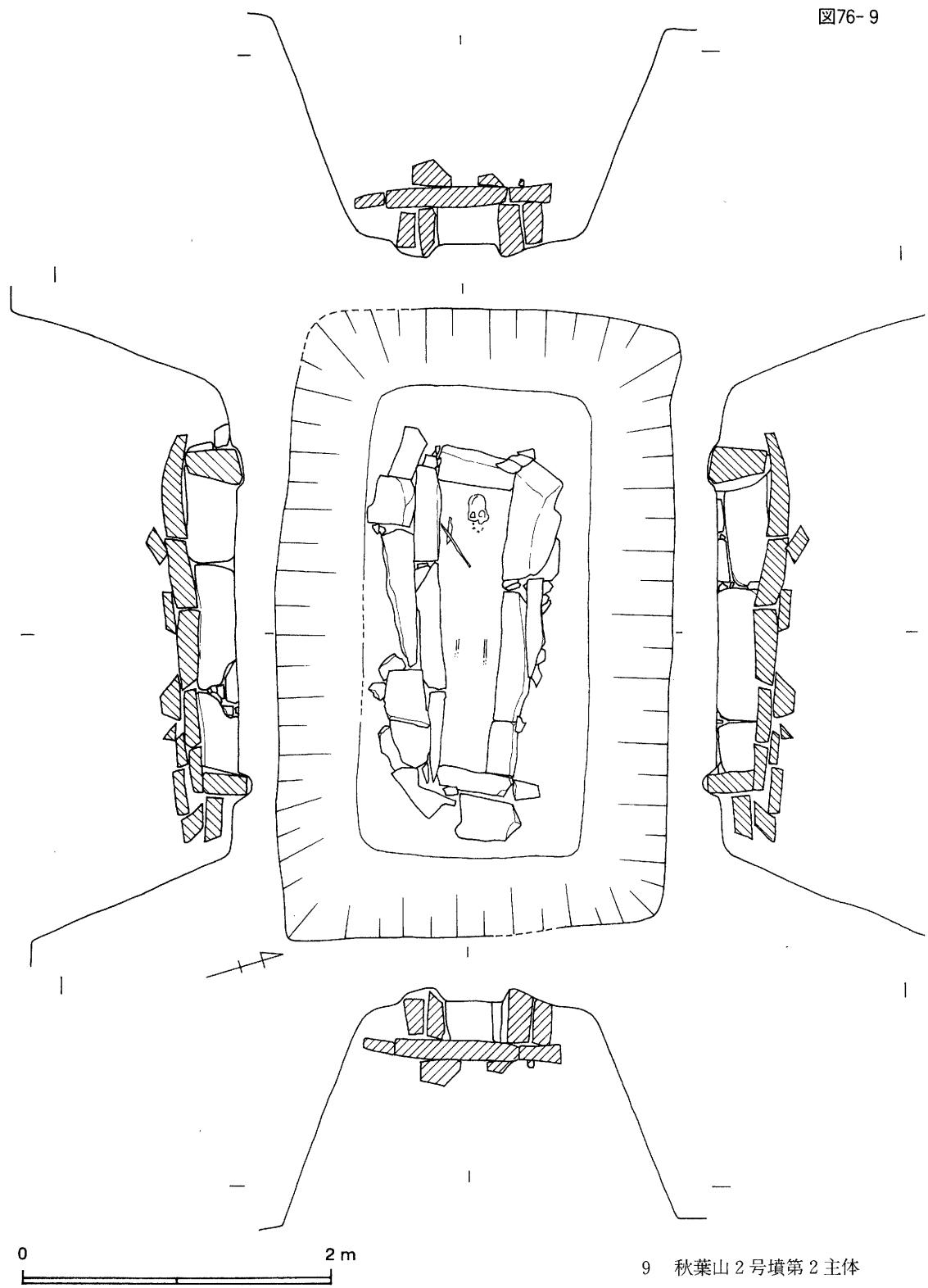


7 養久山1号墳第3主体



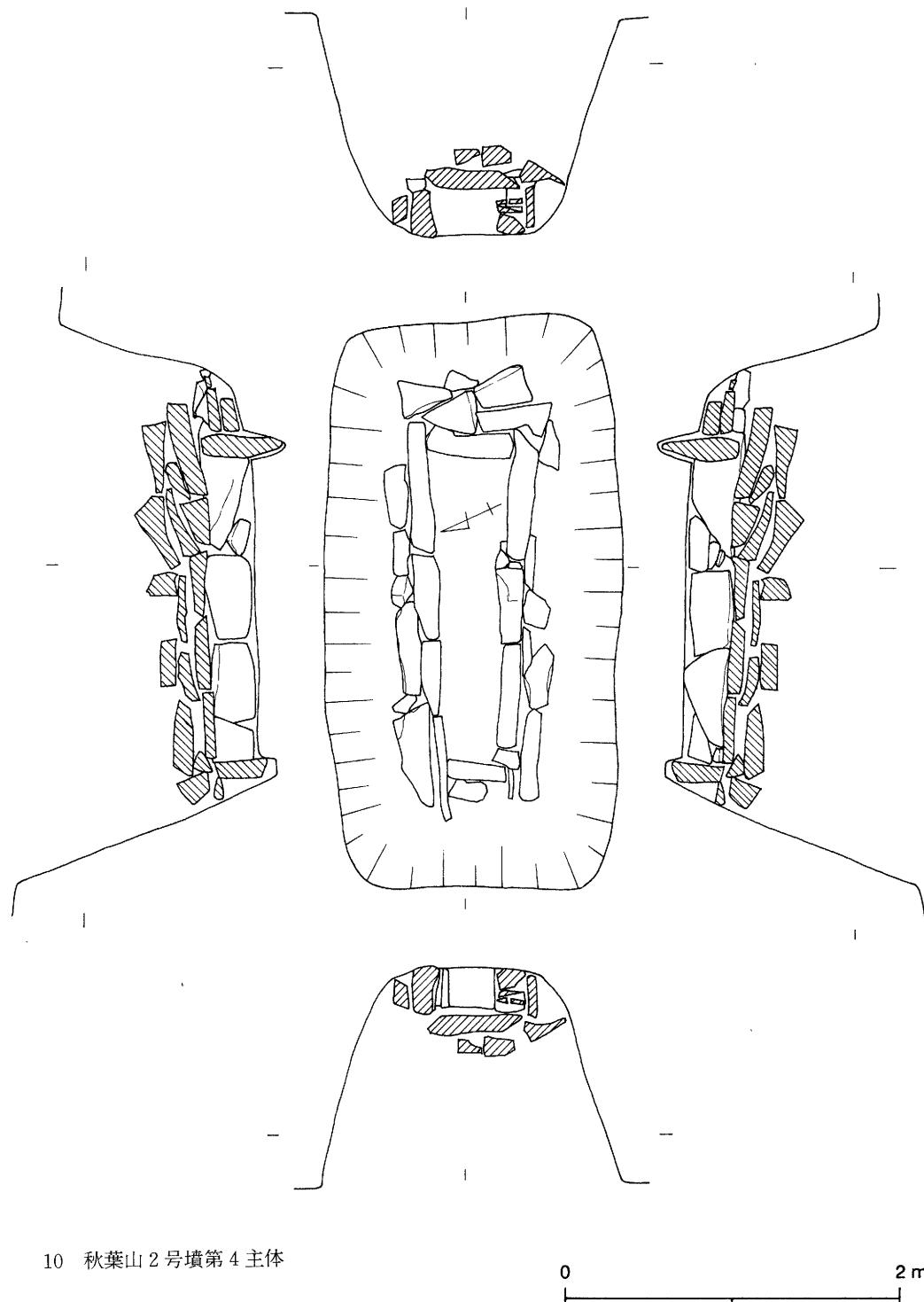
8 養久山1号墳第6主体

図76-9



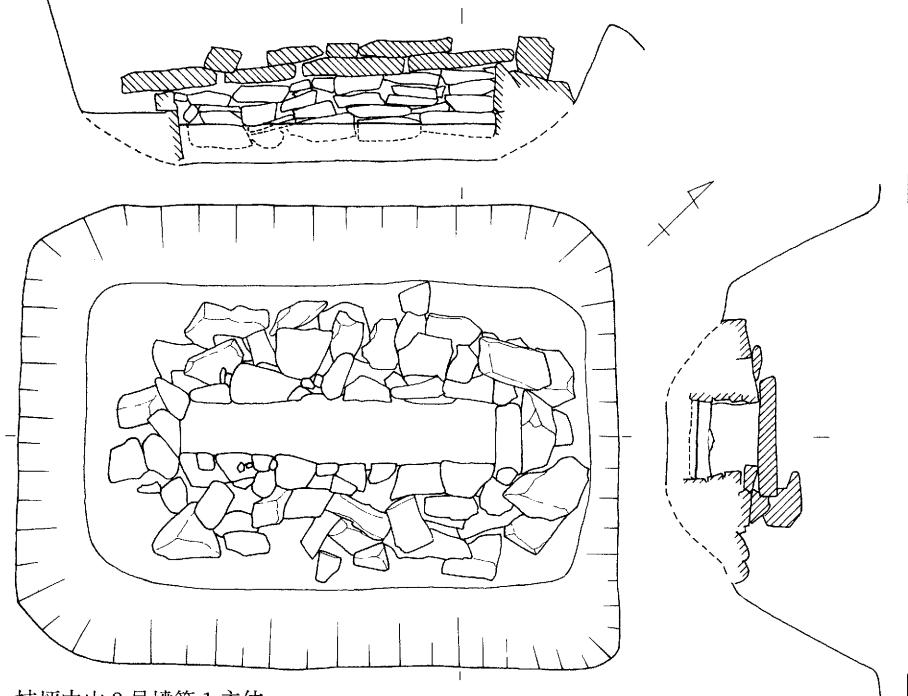
9 秋葉山2号墳第2主体

図76-10

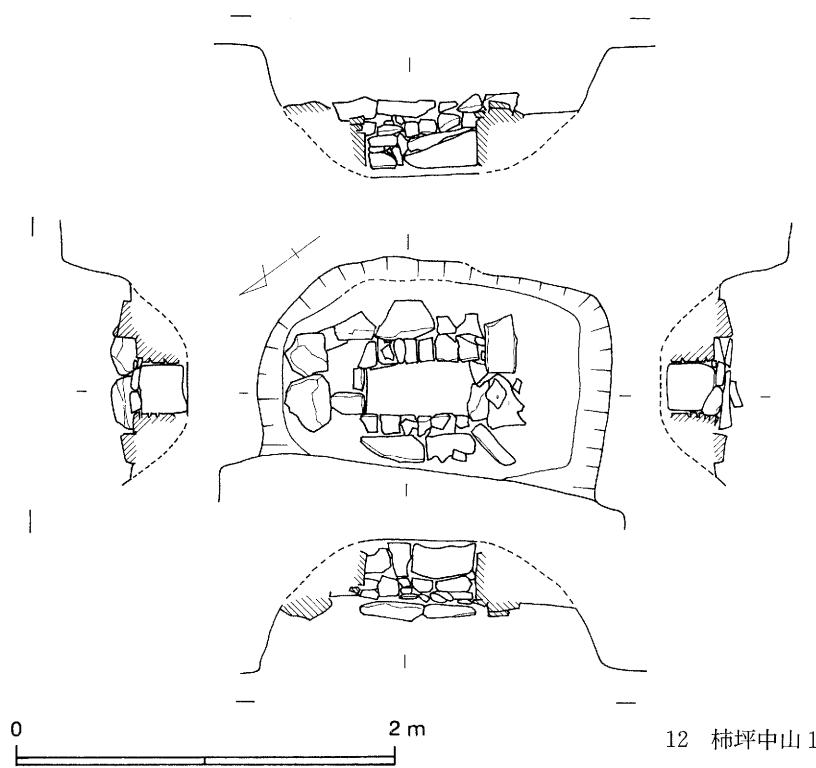


10 秋葉山2号墳第4主体

図76-11・12

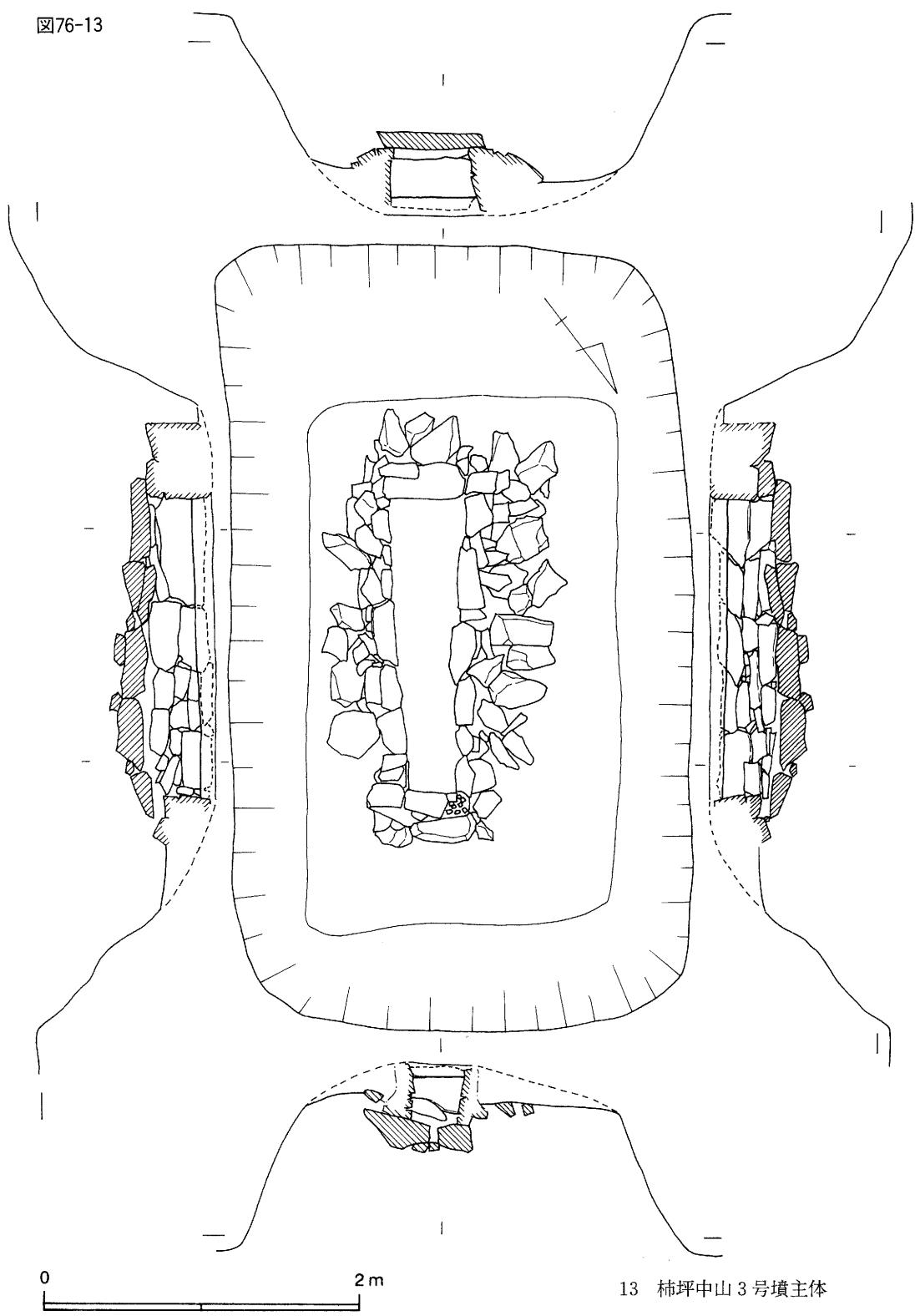


11 柿坪中山2号墳第1主体



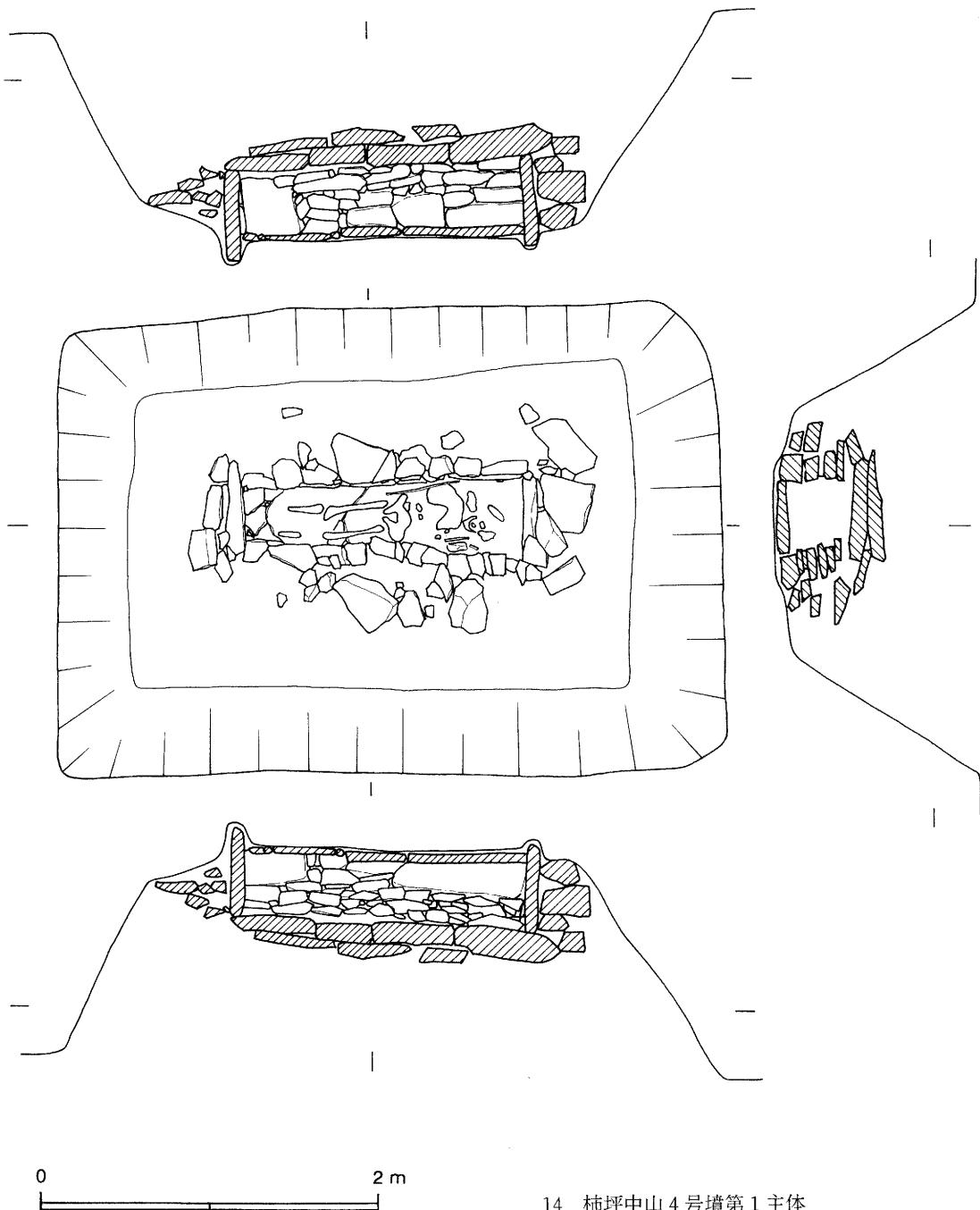
12 柿坪中山1A号墳第1主体

図76-13



13 柿坪中山3号墳主体

図76-14



14 柿坪中山4号墳第1主体

図76-15・16

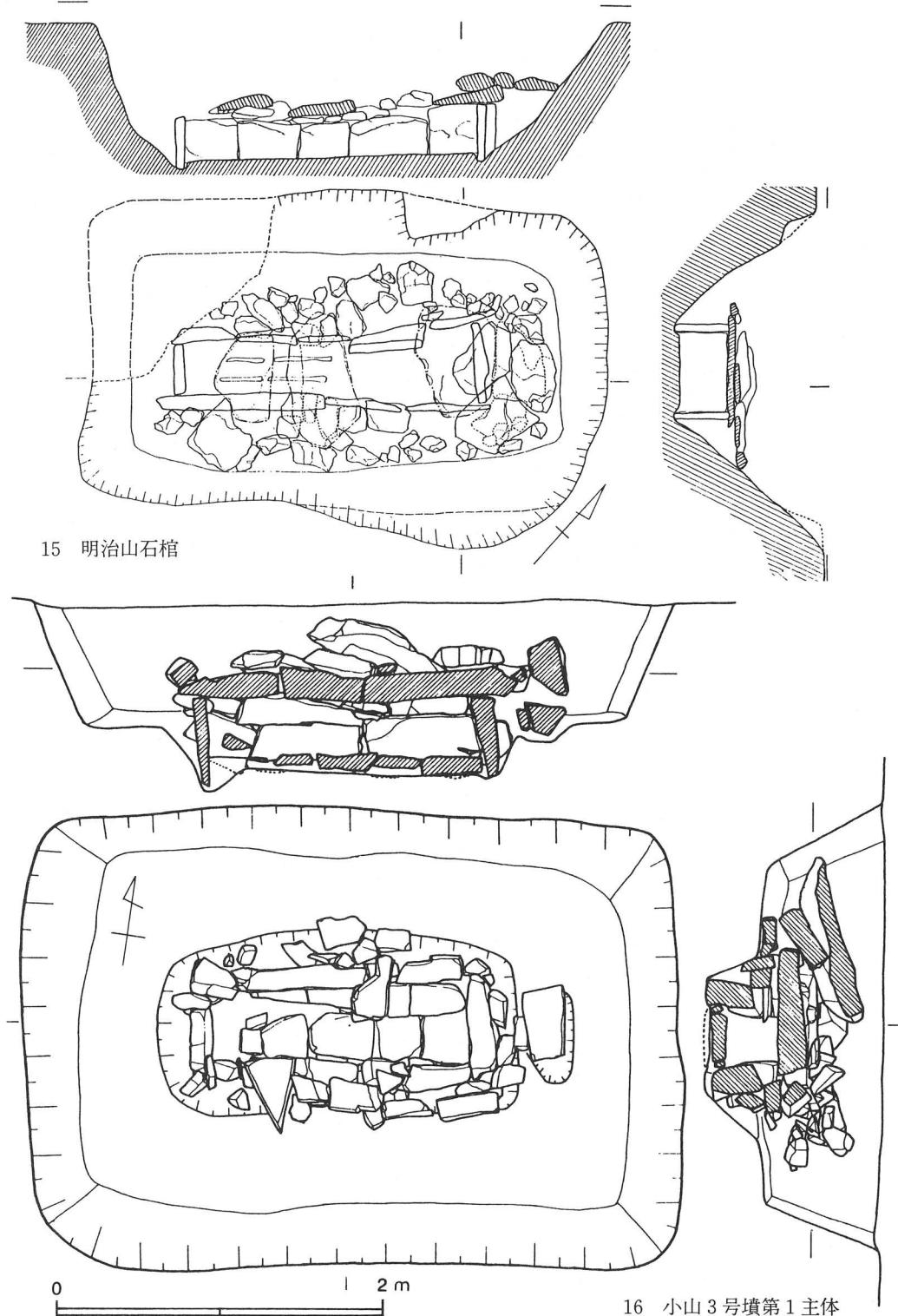
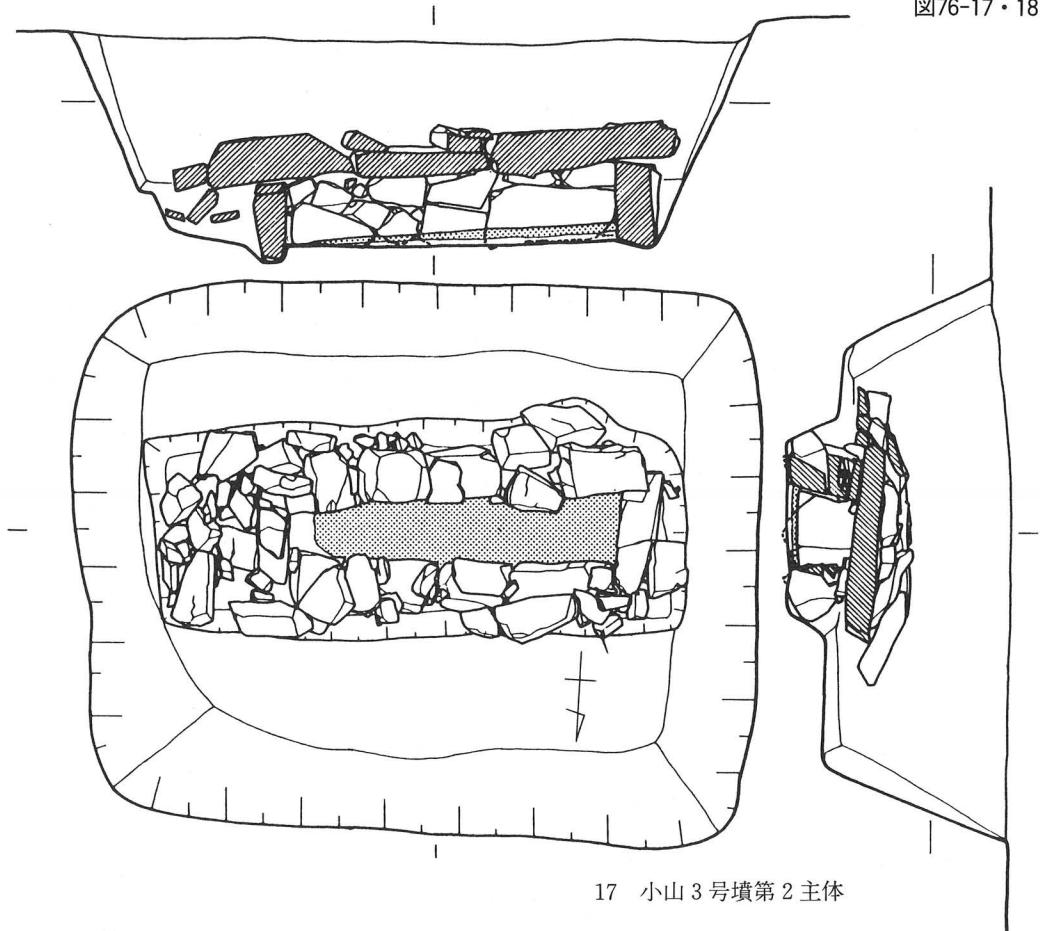
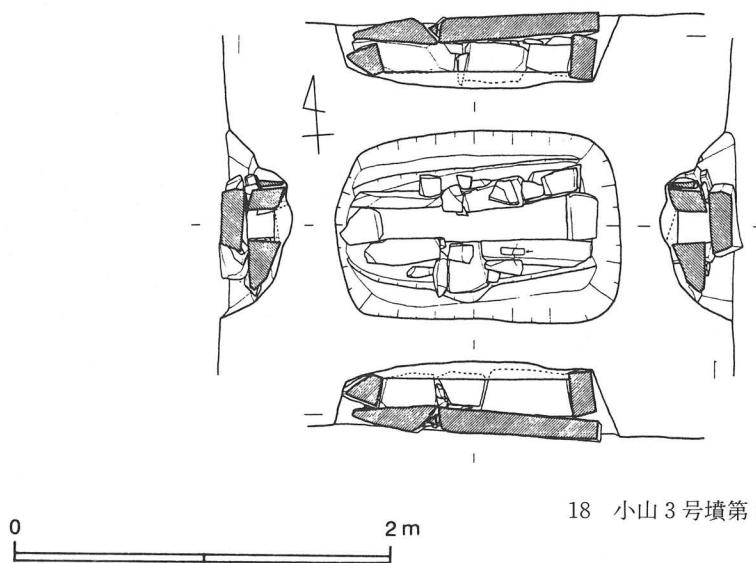


図76-17・18



17 小山3号墳第2主体



18 小山3号墳第7主体

図76-19・20

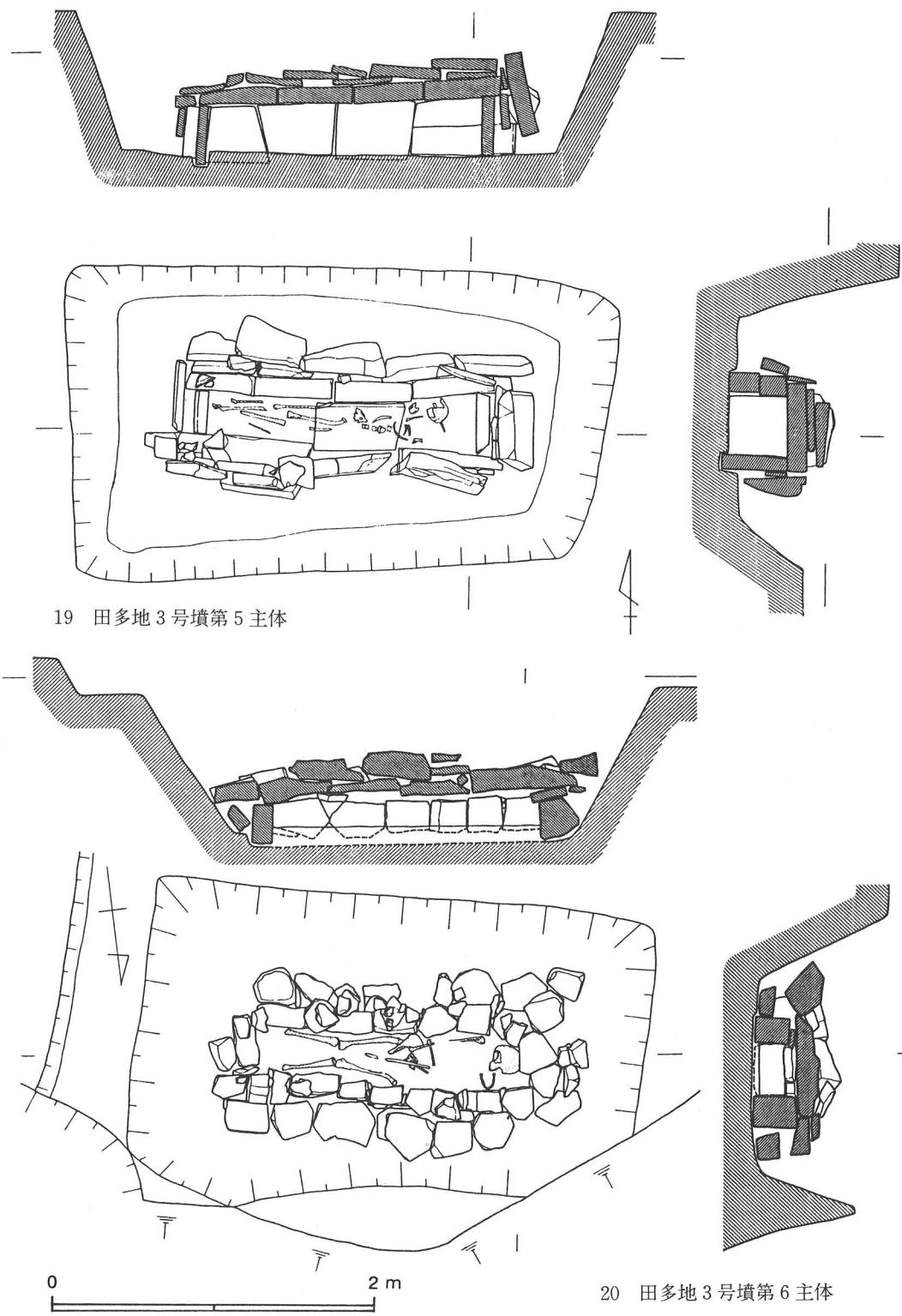
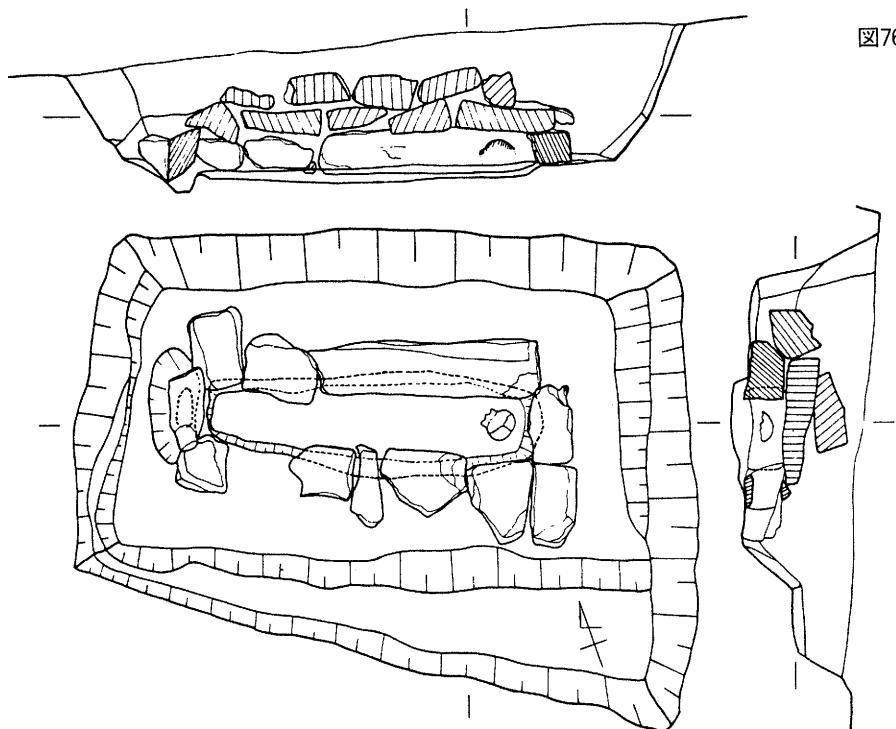
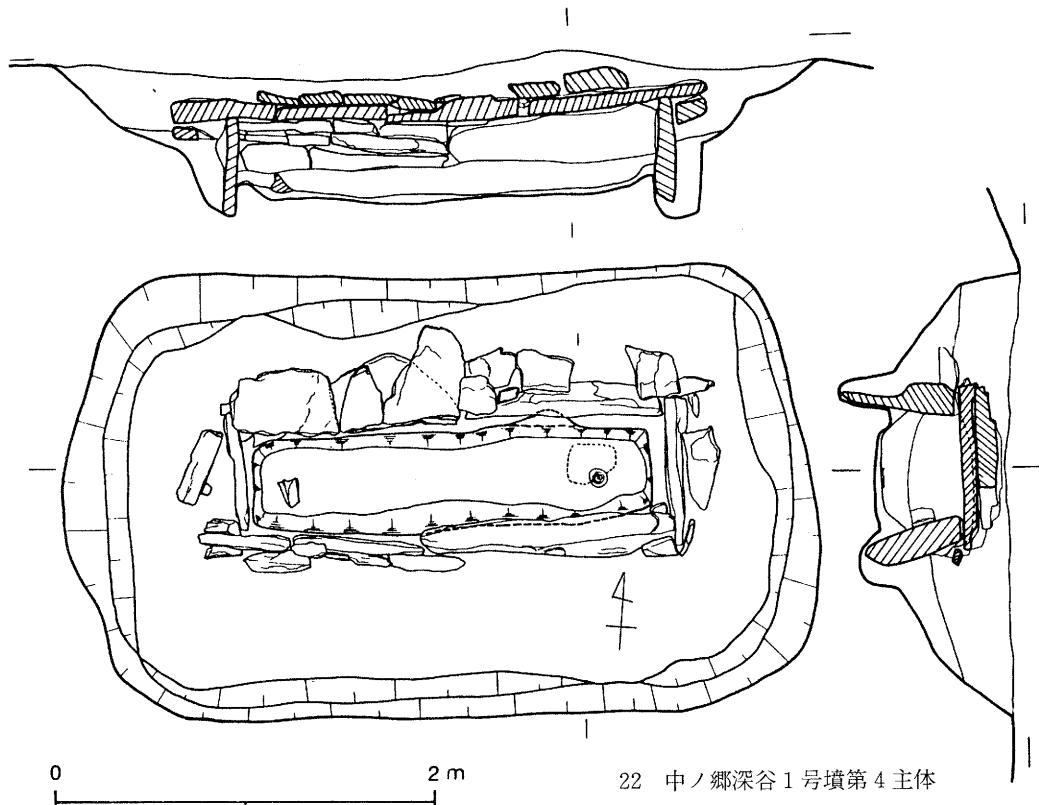


図76-21・22



21 長谷ハナ 5号墳第1主体

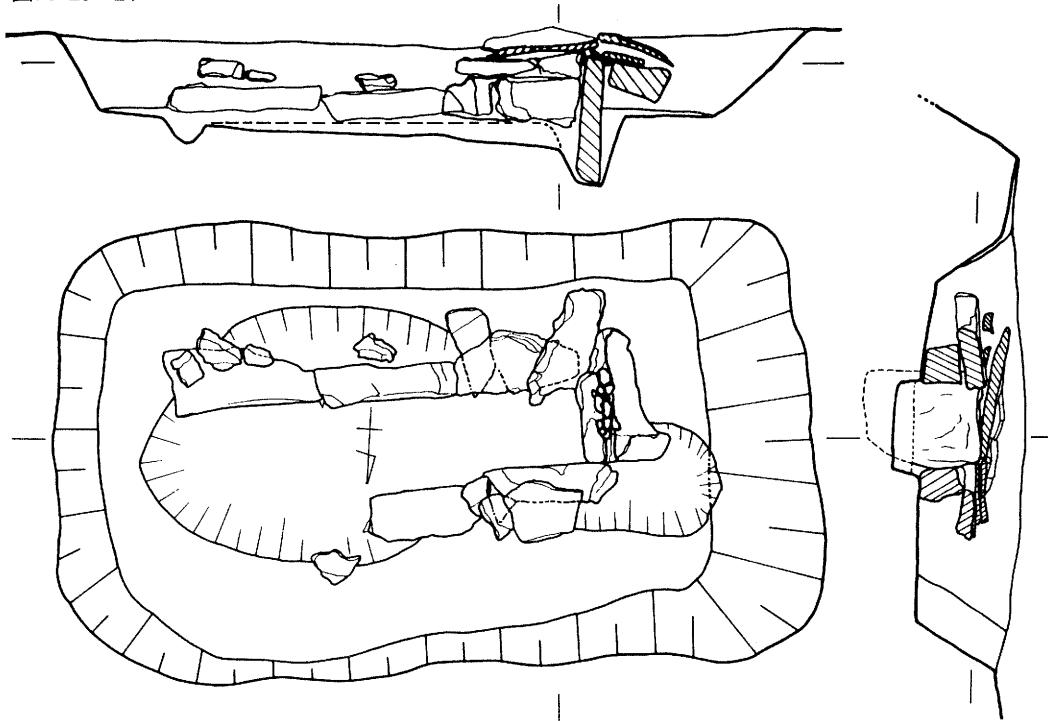


0

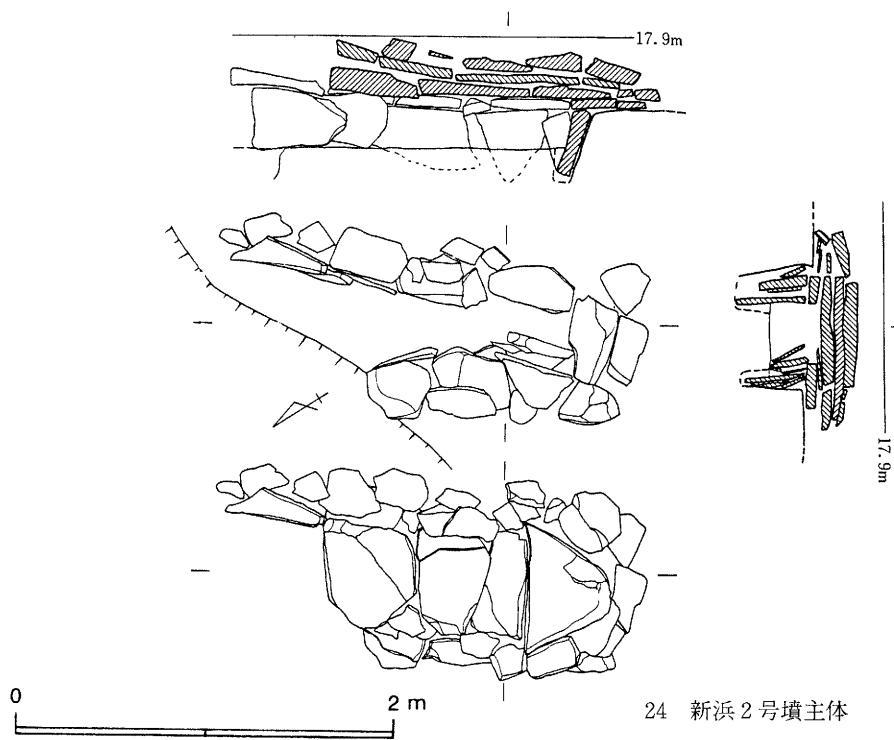
2 m

22 中ノ郷深谷 1号墳第4主体

図76-23・24



23 中ノ郷深谷1号墳第5主体



24 新浜2号墳主体

図76-25・26

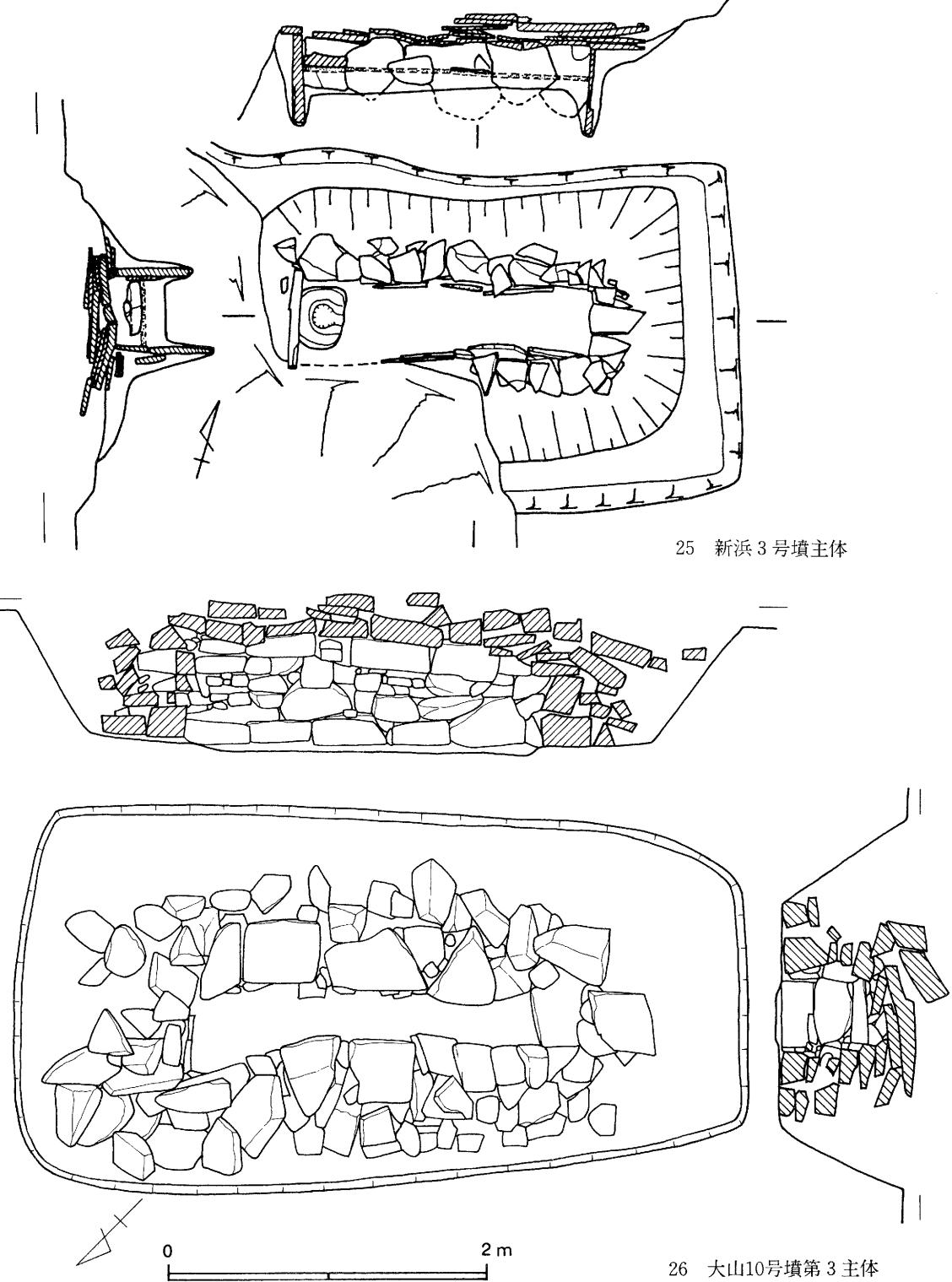
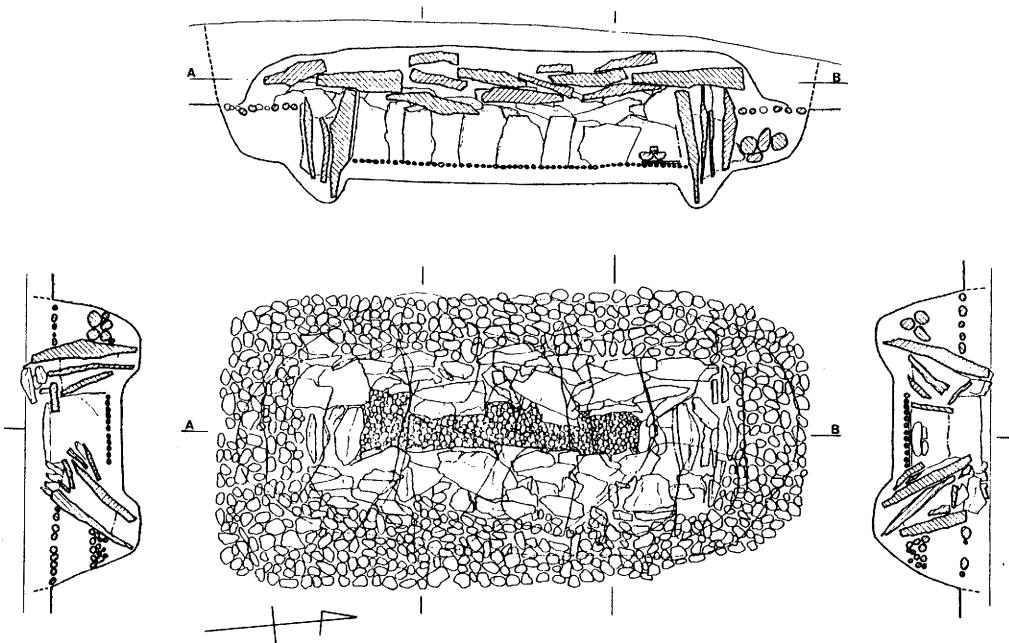
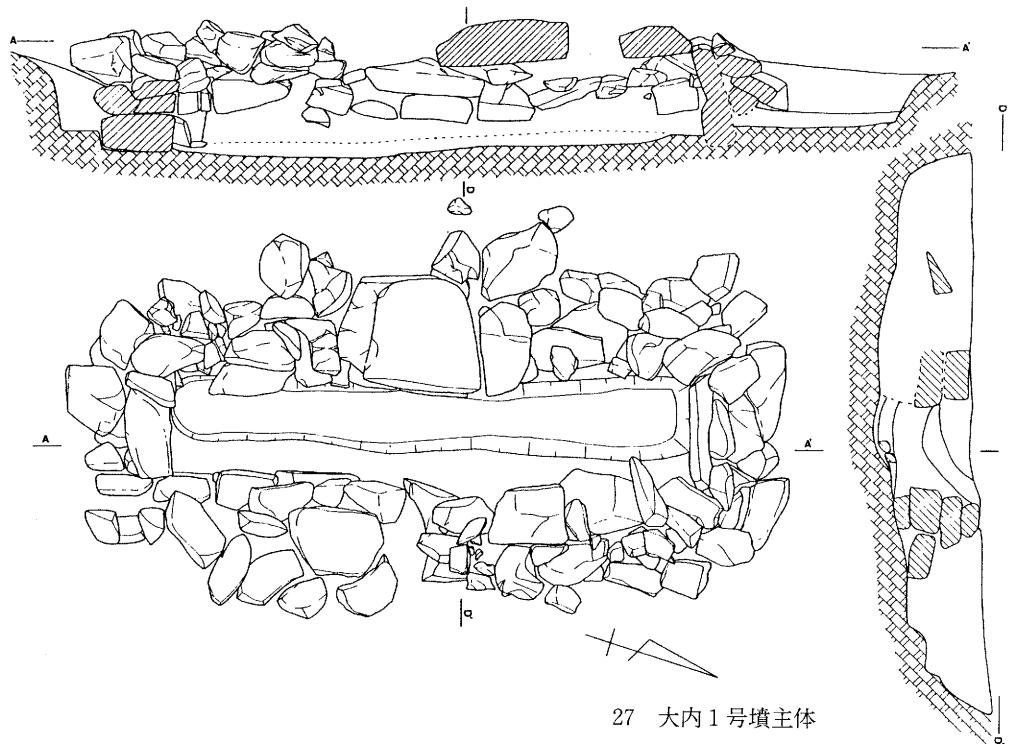


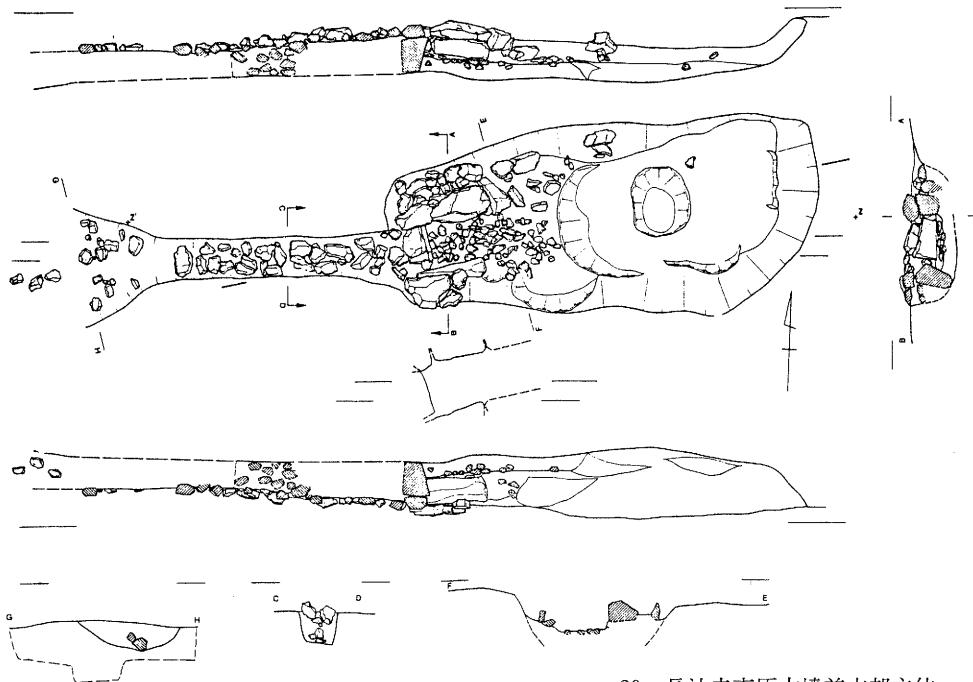
図76-27・28



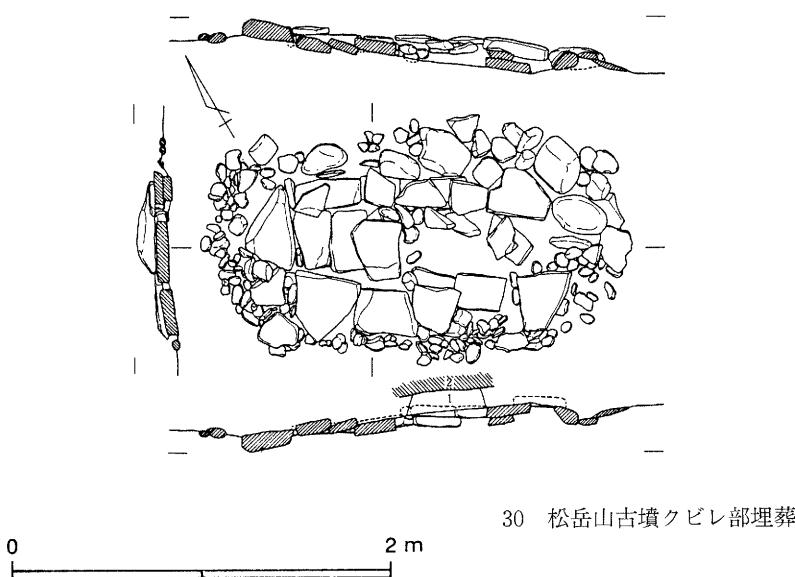
0

2 m

図76-29・30



29 長法寺南原古墳前方部主体



30 松岳山古墳クビレ部埋葬